



我
 の境涯を
 即ち
 の覺悟

目

正しき理解と信念(時言).....本多日生

一、緒言.....本多日生

二、日本の地位.....本多日生

三、日本の培養.....本多日生

四、氏精神の統一.....本多日生

五、國家の現状.....本多日生

六、資本家の覺悟.....本多日生

七、労働者の覺悟.....本多日生

八、資本と労働との協調.....本多日生

九、交通と労働の任務.....本多日生

十、紛争解決の方.....本多日生

危険思想に對する警戒.....本多日生

國民の覺悟.....本多日生

佛教信仰の正統.....本多日生

政治と教化.....本多日生

日蓮上人教義綱要.....本多日生

濠洲に於ける社會政策.....本多日生

記事、報道十數件.....本多日生

號月九年四廿第

發行所東京神田區本町三丁目三十一番地

二の淨法あり、能く世間を護る、何等をか二と爲す、所謂慚、愧なり、假使世間に此の二の淨法なくんば、世間亦父母姉妹妻子宗親師長尊卑の序あるを知らず、顛倒渾亂して畜生趣の如くならん。

雜阿含經(正大藏一三套ノ七)

の聖弟子は心は慈と俱なり、一方に遍滿して成就遊し、是の如く二三四方
皆周一切に、心は慈と俱なり、結無く怨無く悲無く諍無し、極廣甚大に
善修一切世間に遍滿して成就遊す、是の如く悲喜の心も捨と俱な
無く怨無く悲無く諍無し、極廣甚大にして無量の善修一切世間に遍滿し
て成就遊す。

中阿含經(正大藏一二套ノ九)



正しき理解と信念

(大正九年五月五日名古屋電報従業員爲に)

本多日生

目次

一、緒言

即ち諸君、緒言……二、日本の地位……三、国力の培養……四、國民精神の統一……五、國家の現状……六、資本家の覺醒……七、労働者の覺醒……八、資本と労働との協調……九、交通労働者の任務……十、紛争解決の方法

我が日本の現状に就ては色々大切な問題が横はつて居りますが、その中に於て最も重要なものは、國民が正當なる理解を以てこの時代の變化に應じ、又正當なる信念を打立て、安りに勤務をしないやうにして行くことが、何よりも大切なことであらうと思ふ。政治に熱中する者から考へると、普通選挙といふことが非常に重いと考へる者もありません、又労働者自身に取つては労働問題が一番重いと考へませうが、併し諸君は完全なる日本國民であり、完全なる人間であつて、労働者であるとか、従業員であるとかいふのは假の名前であります。その仕事を廢めれば無論職工でも従業員でもない、労働者でも

ない、賤めなくとも労働者といふのは、一方から名けて居るので、同時に光榮なる日本國民であり、同時に完全なる人間である。それ故に労働者といふ立場から考へた時は、その事柄が重いであらうけれども、國民といふ立場に於て考へたならば、更にヨリ重き事があり、人間といふ立場に於て考へたならば、更にヨリ重きものがあるといふことを御承知になりたいと思ふのであります。坊主の方から考へても、斯ういふ事が大事だといつて、本山の坊主が寄附を集めて、本堂を修へると言ひながら、その半分ぐらゐはごま化して使つてやらうといふやうな事を考へて居れば、それは寄附を集めるといふことが一番大きな問題であるかも知れんけれども、それが坊主であると同時に國民であるといふ自覺に返つた時は、さういふ事よりもモツと大切な事が今日横はつて居ることを知るであらう。何事でもその間に當つて居る者は、その事が一番大事だと思ふことも、少し大きく考へるといふと、モツと大きな事が他に存することに氣付くであらう。それ故に日本國民が正しい信念を持つといふのは、どういふ事柄であるかといふことを、公平なる觀察に依つて申上げて見やうと思ふのであ

一、日本の地位

今日本の國家の狀態は、平和克復の大詔にもお示しなさつたが如くに、歐洲戰亂の後に於て國際聯盟の中に加はつて、五大國の一に數へられ、亞細亞の平和を擔任するのみならず、世界の舞臺に出でて日本は意見を發表する地位を得たのである。この小さな國が世界に於て五つの大國の中に數へられる、あとの四つは孰れも西洋である、一つ日本が東洋を代表して、さうして世界の舞臺に意見を吐くといふ地位を得たのである。左様に偉大なる名譽が日本に得られたといふに就ては、同時に責任が重くなつたことが考へられるのである。是が何よりも私は大きな事實であらうと思ふ、建國以來三千年、未だ曾て一たびも國威を失墜しない、のみならず今日は世界の五大國の一に列して、少くとも東洋を代表して、世界の文明に貢獻しやうとする地位を有つて居る國民として、如何に考へべきかといふ事が、何事よりも大きくはなからうかと思ふのであります。

東洋と申すと世界の人類の過半数を有して居るのである、白種人種、歐羅巴人種は數は少ないのである、然るにその少數なる人の爲めに殆んど世界は支配せられ、有色人種は殆ど彼等の奴隷となつて、一步を誤れば復た起つべからざる場合に立至らんとして居るのである、唯だひとり日本國あつてこの東洋の權威を失はずに居るのである、それは確かな事實であります。それ故に他の言葉を以て言へば、諸君の弟分が非常に澤山あるのである、日本人である以上は、支那に於て四億の弟を持つ、印度に於て三億七千萬の弟を持ち、その他の小さな所に於て又數億の弟を持つて居る、十數億の弟を持つて居る所の者が日本人である。諸君等一人々々に皆弟分が十數億萬人あるのである、嘗て印度のタゴール先生が日本に來て講演の際に、「どうぞ日本は飽までも確かりやつて貰ひたい、吾々亞細亞人は一步を誤れば永遠の不幸に陥らんければならぬ、この境遇を救ふて呉れるものは獨り日本である」と言つて先生は掌を合せて歎息して居られたことがあります。それは日本人即ち諸君等に對して、印度の三億七千萬人を代表して、タゴール先生は「宜しく頼む」といつて手を合せて拜んだ譯である。支那は今日は誤解を懐いて、日本を敵とするやうな態度を執つて居るけれども、彼が覺めたる時はやはりこの四億萬の支那人は、日本に對して「何分とも宜しく頼む」と言つて是れ本手を合せて來る弟であります。それ故に日本人はその兄弟を以て任じ、先覺者を以て任じて、そこに偉大なる責任のあることを感じて起たねばならぬのである。これは決して諸君を煽てる譯でも、表れ上げる譯でもない、事實實際それが日本人の責任だといふことは、諸君がお考へになつても分らうと思ふのである。これは一方から考へれば如何にも名譽なことであり、我が建國以來三千年の歲月を経て是に至つたといふことは、實に吾等の誇りである、折角此處まで伸びて來たものが、今になつて、「荷が重いから御免蒙むる」といふやうな弱い事を言つては、先祖に濟まぬ譯である、幸に此處まで發達したる日本の國家を、更に「發展せしめやうといふ勇猛なる決心を

以て奮ひ立つことが、日本人の本領であらうと思ふ、そこにはどれ程の元氣を出しても、どれ程の力を入れても宜からうと思ふ、その大事な所はコロリと忘れてしまつて、更に低い小さい方に向つてコリヤ〜といふやうでは、本末顛倒といふことになる、重い事を忘れて軽い方に轉るといふことになる、決して賢明な人とは言はれないのである。

三、國力の培養

そこに於てこの偉大なる職分を果すが爲めには、國力の培養といふことを心懸けて行かねばならぬのである。日本の國の力が衰へたならば、是等の責任を完うすることは出来ない、のみならず自から倒れてしまふ譯である、それ故に國力を培養して、更に日本國の力を強くして行かなければならぬ。

さて國家の力は何であるかといへば、色々のものが寄つて出来て居るのである、或は經濟の富の力といひ、或は軍備の兵の力といひ、其他色々のものが國の力を形造るのであるが、併し一番根本のものは國民の心である。國民精神といふものが衰へてしまつて、國を思ふ者が無くなれば、幾ら人の數が餘計あらうとも、幾ら山あらうとも、幾らかついだ人が幾ら居らうとも、その澤山の金は國の爲めにはならない、幾らかついだ人は何の役にも立たぬ、すべて武力といひ經濟といひ、その他國家を維持する力といふものゝ根本をなすものは、國民の精神である、その精神が愛國的に進んで行けば、それから富の力も愛國的に働き、兵の力も愛國的に働き、すべてのものが愛國的に行くのであるから、第一は國民の精神である。

四、國民精神の統一

その精神問題には色々面倒な事もあるけれども、大體は國を思ふが爲めに協同一致するといふことが大切な點である。國民の精神が分裂をして、同志討を始めた時には、到底國力は發展することは出来ない。現に英吉利が五ヶ年の大戦争に費したる費用なり、人命なり、その他種々なる損失を數へて見れば實に多大のものであるけれども、五ヶ年の戦争に由つて受けた損失よりも、戦後に起つた労働問題に於て、労働者と國民の精神が分裂を來して、あらゆる工業に故障を起し、石炭工夫は石炭を掘らぬ、交通労働者はその業に従事せぬといふやうな事になつて、所謂三角同盟を起して非常なる騒ぎをやつたその労働状態よりの損失が五ヶ年の戦争よりも國家を危うして居るといふことを、英吉利人は言うて居るのであります。五ヶ年の戦争に於て費したる金銭なり人命は、殆ど國家を擧げて戦つたのでありますから、多大なものでありませうが、それよりも労働状態に於てバタ〜した方が英吉利を危うしたといふことに於て、餘程これは考へんならぬことである。即ち國民の心が一致團結して國家の爲めに向ふ時には、五年の大戦争と雖も變ふるに足らぬが、一たび人心が分裂をして、自分の利益の爲めに國家を忘れるといふことになれば、僅かな騒ぎのやうでも國を危うすることになるのである。露西亞が土崩瓦壊を來したのも、これは戦争の爲めでもなければ經濟の爲めでもない、國民精神の分裂の爲めに、愛國の精神を捨てたが故に、露西亞は過激思想に打破られてしまつたのであります。支那が今のやうな状態になつて居るのも、彼に人が少ないのでもなければ、富が足らないのでもない、今日は貧乏して居るけれども、それは國民が一致團結をして國家を中心にしてやつて行かうといふ決心が足らぬが爲めに、天與の恵としては支那は氣候の上になつても、地理の上になつても、或は又嶺山などの富に於ても多大なものを持つて居るのであるけれども、それを利用することが出来ないで、目前の個人の利益の爲めに相争うて、終に今日の如く衰頹して居るのである。支那を衰へしめたは支那人の心得が悪いからである、露西亞を瓦解せしめたのも露西亞人の心得が悪いからである、英吉利をして後の經營に陥らしめて居るのも、英吉利人の心得が悪いからである、であるから國力の培養といふことの根本に戻ると、國民精神の愛國的であり、一致協力するといふことであらうと思ふのである。

五、國家の現状

それ故に先般の平和克復の詔にも、国力培養の爲めに一心協力せよといふことをお示なさつて居るのである。同じやうに國の爲めに盡すといふ考はあつても、政黨の軋轢が激しくなつて來るといふと、遂に國家を忘れるやうになる、それは憲政會も愛國の精神に於て少しも忘れては居ない譯であり、政友會も國民黨もその他の政黨も愛國心を忘れるといふことはなからうけれども、政權争奪の熱が高まるという趨勢の趨る所ツイ國家に不利なる事をも顧みずして進みたがるものである。又労働問題にしても、國家まで忘れて騒がうといふ考の人は少なからう、國家の大事を餘所にしてまでやらうといふ積りではあるまいけれども、争ひの熱する所、終に國家の不利をも顧みないことになるのである。夫婦喧嘩でも初めから嫌の頭を打割らうとまでは思はぬ、最初は尻べた位振つて置く積りでも、ツイ嫌の方でも不貞腐れを言ふものであるから終には摺古木で頭を打割つたといふやうなことになる、さうして打割つてから吃驚して「これは飛んだ事が出來た」といふので入院さして、入院料を何百圓と取られて、さうして歸つて來た頃の顔には疵が出來て、一生進まない嫌の顔を見なければならぬといふやうなことになる、非常に後悔するけれども、併し勢の趨る所は終にその頭を打割るといふやうな事が、人間の弱點として起るのである。諸君が従事して居られる電車で言へば、ハンドルが利かなくなれば、此處で止めんならぬと思つても、ツイ五間も十間も走つてしまつて小さな子供を轢殺すといふやうなことになるから、そのハンドルが確かりして居らんければならぬ、又は少なくとも一丁なり二丁なり先きが見えるやうでなかつたならば、唯だその電車の動いて居る先き一間か二間だけ見て居るのでは、危なくて仕方がないであらう、それを先きは見なくても車さへ動いたら宜いといつて、先きに子供が居やうが人力車が居やうが構はずグットとやつたらどうだ。「オイ君、そんなに亂暴にやつちや危ないぢやないか」「危ないもケツもあるものか、電車さへ動けば宜いぢやないか、先きに何が居やうが構ふものか、打つかり放題ぢや」

といふやうなことであつたならば、危ないとも何とも言ひやうがない、狂人運轉手ぢや、けれども物事といふものはさういふ事になりたがるものである。それ故に事に當る者は、労働者は労働問題を一番重いと思ひ、政治家は普通選挙が一番重いとと思つて騒がうけれども、今の日本に於て一番重いのにはさういふ事ではないのである。普通選挙といふことも大きいやうだけれども、これは唯だ政治上の形式論である。大勢で寄つてやつて見た所が、選挙する者も料簡が腐つて居る、出て行く人も錢で出て行つて、その運動に使うた錢の戻るやうに、何とかうまい汁を吸はうといふやうな事でもやるならば、博奕を打つて居るやうなもので何も大したものではない、唯がそれを面倒くさくやるだけである。精神が腐つたならば、普通選挙であらうが、制限選挙であらうが、何であらうが、腐つて居るといふに於ては一つのものである。精神が腐つたやうにして掲らんければ如くなる方法も價值なしといふのは、洵に明白な事ぢや。それ故に人心を淨めてこれを腐らぬやうにするといふことが、今日は一番大事なことになつて居る、在外今の日本人は腐つて居る、表面は強い事を言ふけれども、あつちもこつちも一つ火を吹消したならば皆な腐つて居ることは明かな事で、蓋を明けたならば見られたものではない、知れないから済んで居るけれども、知れるといふと飛でもない事があつちにもこつちにもあるといふやうな譯で、實に醜態百出して居るのが日本の現状である。故に精神的に覺めて掛らなければならぬ。

六、資本家の覺醒

そこで左様に大切な國家の現状でありますこと故に、經濟上に就ては互ひに注意を合つて日本の商工業の正當なる發達を妨害せぬやうにして行くことが、何よりも大事であらうと思ふ、資本家がむやみに利益を漁つて、さうして詰らなくその金で遊ぼうと考へて居るやうな料簡は、無論覺醒せねばならぬ、それは金を儲けるといふことも無論善い事であるけれどもその儲けた金を以て國家の爲めに盡し、又は社會の爲めに奉仕するといふ尊い觀念に立つて、資本家も覺かなければならぬ

ものである、資本を投じて居るのは唯だ利益の爲めだと考へて行く、そこに社會を養ふ果があるのである、自分はノラクラして何もしないで、唯だ金を出してやつて居るといふだけではないかぬ、その金を以て國家に奉じ社會に奉じて行かなければ相濟まぬ、自分は學問を以て國家社會に盡す者でもなければ、身命を捧げて國家に盡す者でもなければ、努力を捧げる者でもない、ノラクラして居るのであるから、切めては自分の所有に屬する金を以て、國家のため社會のために適當な奉公を申上げなければ相濟まぬ……といふ自覺を持たぬやうな者は、逆も風上に置かるべき人間ではない、所が都合に日本の資本家に於ては、それだけの自覺さへも起さない者が多いのである、之をも大いに教へなければならぬ譯であります。

七、労働者の覺醒

その反面には労働者も、無論労働といふことは貴い事であるけれども、是れ亦自分の利益の爲めのみで労働して居るといふのでは、左程に貴いことではない、自分は學問を以て國家に盡し、社會に盡すことも出来ない、金を以て盡すことも出来ない、唯だ腕一本、この腕を以て自分も生活をし、妻子も養はんならぬが、どうぞこの腕に縛を掛けて、妻子を養つた外に、この腕から叩き出すことに依つて國家と社會に貢獻をしやうといふことを考へて、そこに初めて一人前の日本人たる資格があるのである。その腕の力を働かさないうで、惰けたり休んだりして、さうして賃錢ばかり餘計取つて贅澤をしやうといふことであるならば、如何に尻理窟を並べても、惰けて休んで錢を餘計取つて、ビール飲んで小便してくたばらうといふやうな者は、決して大した者ではない、それが神聖だの何だのといふのは勿體ない、何も神聖なことはない、如何なる業務も神聖だといふのは、その業務を通じて社會に奉仕し、國家に貢獻し、人たるの光を現はすといふ所に、如何なる職業も尊といふのである、假令大學の先生であらうが、學問を切賣してさうして貰つた月給は酒を飲んでしまつて、イヤ學問の獨立ちやとか何とか御託を言つて居るやうな者は何でもない、彼等は料簡が低い、料簡が小さい、頭腦が壊れて居るから今日のやうな下らぬ問題が盛んになつて來るのである、私はチウ考へる。分り切つた事ちやがこれが一番大事な點である、内部に入つて労働解決方法がどうちやとか、組合がどうちやとかゴジヤ／＼言つて見た所が、詰り労働問題は皆が能く働いて立派にその能率を發揮し、その職務を全うしてやつて行く、又その事業を経営して居る資本家は飽までもそれ等の人々の幸福を圖るやうに、誠心誠意真心を以て之れに向つて行くやうにさへしたならば、労働問題の解決は易々たるものである。それが資本家も口では色々な事を言ふけれども頭腦が腐つて居り、労働者も理窟ばかり並べるけれども、遊んで惰けて餘計錢を取つて贅澤して行かうといふやうな手合ばかり寄つたならば、如何なる法律を作つても、如何なる經濟上の解決をしても結局駄目である。心得を直ほして掛かりさへしたならば面倒な事は無くなつて來るのである、規則ばかり幾ら書き並べても、お互にそれを破つて掛らうといふことであつたならば、何にもなりはせぬ。日本の今日の有様は、總べて仕事には監督を附け、その監督に又監督を附けるといふ状態である、道路を掘返して土工が仕事をやつて居る、その傍に洋服を着た先生が監督に來て居る、その又洋服の先生が惰けて居りはせぬかといふので、又見廻りの監督が來る、その又監督に監督を附けるといふやうな譯で、終ひには監督ばかりになつてしまふ。それは働く者が初めから惰けて掛からう、少しでも狭く廻つてやらうと考へて居るからであつて、そんな事は人格といふものを持たない人間のことである。英吉利の労働者などは、監督などを置いたら仕事をせぬと言つて居る、吾々は自分の仕事を監督されなければならぬ位ならば、監獄の罪人も同じぢやないか、吾々は完全な人格を有つて居る、監督などを附けるといふのは失敬だ」と言ふ、その代り彼等は監督などを置かないでも、少しも自分のやる責任を過たない、時間を間違へたり、仕事の間に居睡りしたりすることは斷じてせぬのである。所が日本では造船所には、四十人も五十人も過視する選査みたやうな者を置いて、一人前に四十圓とか五十圓の月給を出して居る、さうするとその費用が月に二千圓も二千五百圓も掛かるのである、さうして妙な箱みたやうな物の中に這入つて、眼玉を光らして居る、そんな者は廢めてしまつたらどうか」と言ふが、廢めてしまへば泥棒ばかりして、其所にある鐵片でも何でも皆

懐中に入れて持つて行つてしまふ、仕方がないから高い月給を拂つてさう云ふ者を置いて監視をさして居る、さういふやうな事では労働の神聖はない、眼を凝せば泥棒するといふやうな事は、實に情けないことである、モウ少し本當の問題に進んで行かなければならない。

八、資本と労働との協調

諸君等に對しては私は非常に同情するのですが、日本の電車に乗る人を見て、下らぬ事に理窟を言うたり一寸油断して居れば切符無しでビヨイと飛降りをして行つてしまつたり、煩さい事です、順に譲り合せて中に這入つて呉れと言つても這入らないし、始末の悪い者が澤山居る、成つて居らぬ、さういふ事はお互が皆その考で、これを善くして行かなければならぬものである、それ故に下らない屁理窟より、やはり日本で從來教へて居つたやうに、人は互ひに譲り合ひ、扶け合ひ、優良な精神を以て、車掌が「中に這入つて下さい」と言へば這入るといふやうにしなければ、「這入らうと這入るまいと俺の権利だ、そんな事は指圖を受けないゾ」といふやうなことを言ふ、それで人が押しでもしやうものならば直ぐ喧嘩を始める實に厄介なことである、それで労働者は腕を突張つて獨りて威張つて居るけれども、それは車掌などから見たら厄介千萬でせう、労働者は腕を突張る、マントは袖を突張る、女は尻を突張る……どうにもならぬでせう。さういふ所はやはり優しい道徳觀念を以て、社會は相身互ひで、共に譲り合つて温順にやつて行かなければ、到底いかぬものだといふことは電車の内を御覧になれば餘程能く分る、それは大きいと小さいだけで、電車の内も社會全體も同じことである。社會がその通りで、労働者は労働者の権利を突張る、資本家は資本家の権利を突張るといふので、互に腕ばかり突張つて行つたならば、必ずや世の中といふものは面倒になつてしまふのである。

それ故にどうかお互にこの國家を思ふ觀念に於て、又社會に盡す觀念に於て、自己の利益を制限し、自己の慾望を抑へて、さうしてその金から産出す利益の一部は國家の爲め社會の爲め、又自分の經營して居る會社の従業員の幸福の爲めといふやうに考へて、自分の利益が一分五分より二割、三割より三割といふやうな、飽くなき慾望を制限せられなければならぬ。金の利子といふものは無論取るが宜いけれども、三割だの五割だのといふ無法なことはいかぬ、所が戰爭中には何十割の配當をした會社がある、さうして「俺の會社は何十割ぢや」といつて誇つて居るが、さういふ事が社會を不健全に陥らしむる第一の原因である。資本に對する正當なる利益といふものは、一割とか二割とかいふ位の所までを以て満足しなければ、他の事に於てそんなに利益のあるべきものではない、工業に於てのみ三割、五割を取らうとするのであるから、これは間違つた考である。又労働者も今日は相當の賃金を得て居るのであるから、惰けたり休んだりするのは、疲れるが爲めでなくして、ノラクラ根性の爲めすれば疲れることもあらうけれども、今日の惰けたり休んだりするのは、疲れるが爲めでなくして、ノラクラ根性の爲めに或は休み、或は惰けるといふことが随分あらうと思ふ。疲れた爲めに休業するならば已むを得ぬけれど、さうでなくして横濱より休業するといふことが非常に殖えて居るのである。この労働の感がなくなつて以來、能率の減つたことは恐るべきものである。であるから三百人で間に合ふ會社でも五百人も雇つて置かなければ、休業をやつたり怠業をやつた場合に困るといふので、數ばかり殖やして、さうして給金ばかり殖えて仕事は疎に出来ないといふことになつて居る、それは體かな事やうであるけれども、上下で差引大變な違ひになつて来る、人が殖えて仕事が出来ないといふことは恐るべき結果である、戰爭でもするのであつたならば全敗である——戰爭で考へたら直ぐ分る、兵隊の數は多いけれども弱、さうして食ふだけは同じやうに食ふから、後方の兵站部から米を送つたり味噌を送つたりする手數は大變なことになる、それで愈々戰鬥が始まるとカラ弱くて、送けることを一番に考へて居る、而も食ふ物だけは「馬鹿の大食」といふやうな譯で、弱い奴の方が餘計食ふといふことになるから、どうにも斯うにも始末が悪い。電氣會社のやうな會社でも同じ譯で、數を殖やしてそれが疎に働かないと來た日には、如何なる方法を以つて、何遍算盤を持つても結局駄目だといふことになる。であるから皆

がやはり精勤をしてやつて行くやうに、その代り諸君の生活は相當に得られるやうにして行くといふことは、無論會社が十分に考へてやらなければならぬ。そこは持ちつ持たれつして行くことに於て、その事業が發達する、その事業が發達する中に國力が伸びて行くのであるから、何處までもこの國家に盡すとか、社會に竭すとかいふ考が大事なのである。

九、交通労働者の任務

殊にこの交通事業は、直接國家に貢獻し、社會に貢獻して居る非常な立派な仕事であると思ふ、能く宗教でも——佛教では御承知の通り「小乘」「大乘」といふ言葉を使ふが、大きな乗物、小さな乗物と書いてある、乗物といふものは、甲の地點より乙の地點に人を運んで行くといふことは、その人を助けることナンである、そこで佛様が一切衆生を助けるのに、大乘の車に乗せて助ける、小乗の車に乗せて助けるといふので、「乗物」といふ字が書いてある、であるから人を乗せるといふことは、非常に社會を利益して居る事である、それは何事でも社會を利益しない仕事といふものは無い、この机上にある花瓶でも、これが美しく出来て花を立て、斯うして見て居れば、これは吾々の快感を喚起して居るもので、即ち人間の幸福を増して居るものである、併し花瓶などは時に依れば無くとも済む、又竹の筒に挿して置いても済むものではあるけれども、交通はさういふ譯のものではない。殊に今日のやうに雨でも降らうものならば、市内の交通といふものは、電車がある無しとに依つて、市民の幸福に關係することは著しいものである、今晚私の居る寺では法華經の講義を聞きますが、若し諸君等が動かして居るこの電車が無かつたら、聴きに來る人は三分の一も無い譯である、さうすればそれ等の人が善き教を聽いて歸るものも、又その事を計畫したる吾々の方が相當な聽衆を得て悦ぶのも、諸君等のお蔭である。それから呉服屋から言はうが誰から言はうか、この交通機關の爲めに毎日々々非常な人間が幸福を得て居るのである。だから、諸君方が勤勉にその職務に従事して居ることに依つて社會に奉仕して居るのであつて、別に歸けた錢を慈善事業に寄附しないでも、やつて居る仕事を誠實にやれば社會に貢獻して居る、給金を貰ひながら大勢の人の幸福を助けて居るといふことになるのである、その代りこれを勝手にストライキなどをやつて休むとかいふことになる、大勢の市民はそれに依つて非常な不便を感じ、不幸を招く譯ナンである、即ちこの仕事は社會の爲めにやつて居るのであつて、單に給金の爲めだけにやつて居るものではないから、給金の問題は給金の問題で起つても別な事にして、仕事は仕事としてちゃんとやらないうと「ストライキをして脅かしてやれッ」といふやうな事は、甚だ不道德なことである。

十、紛争解決の方法

今まで西洋人がストライキは合法である。労働者の権利を伸ぶる爲めには正當なる方法であると言つて居つたけれども、夫労働者がはホンの少しの時分にさういふ事を言ひ出したので、資本家が非常な横暴を極めて居つて、労働者は惨な目に遇つて、どうしても之を動かすことが出来ないといふ時代に、資本家を弱らす爲めにストライキをやるといふとに依つて、労働者の地位を高めて來た、その時に合法といふ言葉を使つたのである。今日は労働者の方が非常に勢力が強くなつて、寧ろ資本家の横暴に代るに今度は労働者の横暴になつて來た、英吉利の如きも三角同盟のストライキの場合には、實に資本家を弱らすばかりではない、國民を弱らしてしまはうといふやうな勢ひで、七日の間に倫敦の都を干ばしにしてしまふといふやうな猛烈な事をやつた。左様な事になつたから今日は「ストライキは罪惡なり」といふことに變つたのである。ストライキが合法だとか、當然の事だといつたのは昔の夢ぢや、今日の惡化しつゝあるストライキは罪惡である。殊に交通労働者が自分の賃金を得んが爲めに、多くの人の交通を遮断するといふことになつたならば、その電車に乗る人の中には、親が死にかけて居るといふので急いで家に歸らうとして居る者もあるだらうし、或は電報が來て急ぎの用件爲めに、電車の時間で次の汽車に乗らうとして居る者もあるだらう、色々その一人々々の用件といふものが皆あつて電車に乗り居るのである、何も無駄

に乗つて居る者は一人も居らぬ。それを自分の僅かな賃銭のためにボン／＼電車を止めて市民を困らすといふことになれば、多くの人の幸福を侵害することになるから、確に罪惡である。

英吉利、亞米利加に於て労働状態が非常に變つて來て居る、ストライキに對する相場が未だ定まらない、善いものとも惡いものとも分らないが、吾々の所ではちやんと悪いものと相場を決めて居る、ストライキなどをやらなくとも労働者の幸福を増すべき途は澤山ある、それを西洋はやり損つて來たものである、殊にサボタージュなどといふものは問題にならぬ、罪惡である、それよりは資本家を覺醒せしむる運動は、別に政治上なり、宗教上なり、道徳上なり、國民的運動に依つてやつて行くが宜い、直接労働者と資本家とを闘はして、國民が傍觀して居る、政治家が傍觀して居る、宗教家が傍觀して居るといふやうな事はいかぬ。公平なる立場に居る者が判斷をして、資本家の態度が悪かつたならば、労働者の手を俵たすして、政治家なり宗教家なり國民なりが資本家を膺懲する、労働者が横暴に移らんとしたならば、これを抑制する力は政治家なり宗教家なり國民であつて、何も資本家をして労働者と直接談判せしめなくても宜しい、斯ういふ態度に出るのが健全なる文明であらうと思ふのである。近頃英吉利に於ては少しその傾きを生じて來たやうだが、日本は眞似ばかりして居るのであるから、英吉利がさうなると日本の新しいがりの手合がさういふ事を言ひ出すに違ひないから、モウ少し落着いて觀て居つたならば私と言ふやうな事になるであらうと思ひます。

左様な譯であるから、諸君は誠に大切な仕事をなさつて居るのである。諸君が一週車を出てスーツと市中を廻つてお出でになる間にでも、どの位大勢の人を助けて居るか分らぬ、所謂大衆である、昔の人力挽か何かならば、一人で一人しか運べない、これは小乗ぢやけれども、諸君の働いて居る電車は、何十人でも乗せて而も時間も非常に早いのであるから、所謂佛教の大乗の教のやうなもので、多数の人の幸福を保全しつゝある職業であるから、その職業の神聖なのに省みてどうぞ一層精勵努力せられんことを希望するのであります。(完)



危険思想に對する警戒

(一)

本 多 日 生

五、危険思想宣傳の目標

然らばその勢力がどういふ風になつて居るかといふと、この勢力も亦實に恐るべきものであらうと思ふ。その勢力を扶植した淵源も前に云ふやうに古い事であるが、近來特にこれが勃興して參つた。その唯一の援助を爲したるものは歐洲の大戦である、各國が國力を困憊に導くやうな事をやつたから、其處で國家といふものが破壊し易くなつて來た。詰り身體健全なる者には病菌が取りついても中々斃すことは出來な

いけれども、もう貧血になり衰弱を來たして、色々の弱點を生じて居る所に向つて之れを倒さうといふ運動をやる様な者であるから、國家が國家の理想も失つて來るし、結合力も失なつて來るし、經濟力も弱くなり、國民からは國家といふものが嫌はれるやうになり、恐ろしいものだと思はれる様になつて來るから、ボルシエヴィズムが國家を破壊するのに非常な機運を得たので、彼等は豫想外に時機が早かつたと思つて居る。まさか斯う早くは來まいと思つて居つたが、實に意外にも早く來たと言つて、喜んで祝盃を擧げて居る。歐洲の大

戰亂は、我が主義宣傳の爲めに興へられたる所の、實に適切なる援助運動であつたと云つて、一番に麻羅巴の戰爭を喜んで居るものは過激派である。果せる哉それを一區點として戰爭中に既に露西亞を倒し、戰爭の終りに獨逸を弱らせ、戰爭が済んだかと思ふと佛蘭西は言ふ迄もなく、英吉利、亞米利加に飛火して、今日はそれが爲めに種々なる影響を興へて居る。今英吉利にしてもその國運の前途は、戰爭から受けた打擊よりも、この過激思想が這入り、労働運動が悪化した事に於て、英吉利の前途は容易に恢復が出来ぬと言はれて居る。戰爭の創設よりもこの過激思想の宣傳、労働運動の悪化が恐るべきものぢやと言つて居る。亞米利加も今日に於ては世界に敵無き程の強大國に成つて居るけれども、亞米利加を若し滅ぼす者があるならば、それは亞米利加人の精神を襲うて居る所のボルシエヴィズムである。そうして又露西亞の方の状態は英佛軍も撤兵をしたが、これ皆本國に於ける労働者が、間接に過激派に通じて居るが爲めに、過激派と戦ふことは許さない、故に撤兵をしなければ國內が治まらないから名を他の事に借りて英吉利も佛蘭西も遂に兵隊を國に引き揚げた。

つても鐵砲を打つ學校ではない、彼等は惡思想を宣傳して國を破るのが唯一の兵隊だと言ふて居るのであるから、労働者を煽動して運動を起させる方法、或は労働心理を研究して、斯う突いたら斯うはねるといふやうな事を習ふのである。それが五千人もその學校に這入つて、即ちボルシエヴィズムの將校が五千人も出来る、實に容易ならぬ事である、軍隊ならば五千人位何でも無いけれども、五千人の惡思想の宣傳の將校が出来たといふ事になると一日本なら日本に對して五千人のボルシエヴィズム宣傳の將校が這入り込んで来たといふことになれば、軍隊にしたならば實に何十師團の軍隊とも分らん程のものである。それは本月二十三日と思ひますが、東京の新聞にも出て居つたことである。それから樺太の如きは、既に過激派の爲めに占領せられて、日本人は壓迫を受けて逃げ道が無くなつて困つて居るといふことで、舞鶴から日本の軍艦が二隻、之れを援助する爲めに行つて居る、即ち三笠と見島といふ二隻の軍艦が行つて居るが、氷が張り詰めて、さうして薄い所があるので上陸することが出来ない、樺太に居る日本人と我が艦隊との交通が尙ほ出来ないの心配をして

亞米利加もやはり同じ關係に依つて西伯利亞軍を引き揚げた。日本だけは幸にして國家の事情が、労働運動が過激派に款を通ずると言ふやうな事になつて居らなかつたから日本軍だけは踏み留つて居るけれども、今日は非常な窮境に陥つて居る譯である。さうして西伯利亞全部は過激派に占領せられて、浦鹽のトツ先きまで彼の勢力が蔓延してしまつて、日本が助けて居つて政府は、その主なる役人が船に乗つて救済に逃げて来たが、上陸も出来ないで船を叩き賣つて何處か他の國に逐電しやうかと云ふやうな譯である。朝鮮はどうかと言へば、朝鮮人に於てはボルシエヴィズムに感服して居る者が非常に多いと稱せられて居る。朝鮮暴動の中に、この主義が這入つて居ることは周知の事實である。而して支那はどうであるかと云ふと、これも各省に蔓延して居つて、丁度二三日前の新聞の報する所に依れば、露西亞の各新聞の記事に依ると、今度は支那人五千人をボルシエヴィズムの兵學校に入れて之れを訓練して支那に勞兵會を作つて、一舉にして支那を過激主義にして終ふと云ふ計畫をしたといふ事である。五千人を兵學校に入れるといふ事は、實に大きな事である。兵學校と言

居ると云ふ事は、これ本二三日前の新聞に遼東省の副官がその事を公言して居るのである。斯の如く過激派の蔓延といふものは非常な勢力のものである。然らば日本にはそれが来て居らぬかという、澤山来て居ると思ふ。又その運動費用といふものも、随分日本に這入つて居ると思ふ。私が或る人から聞く所に依れば、横濱の銀行に五百萬圓受取人の書いてない爲替が来て居る、それは受取人が書いてなくとも受取ることが出来るので、御承知の通り「此の爲替持参人に渡して呉れ」と書いてあるから、名前を書かなくとも、其の爲替の相札を持つて行きさへすれば渡すのである。兎に角名宛は分らぬけれども五百萬圓来て居る。東京の正金銀行にも何百萬圓来て居る。京都の同志社大學には基督教宣傳費の名に依つて三百萬圓来て居る。これ等は大抵は亞米利加から来るのでありまして、亞米利加がボルシエヴィズムの本國になつて居る、露西亞の過激派といふけれども、本部は亞米利加に置いてあると稱せられて居る、事實は能く知りませぬが、中々亞米利加は根據が固くなつて居るのであります。そこでさういふ金も亞米利加を通して來るとい

ふことである、その實否は能く分らぬけれども、大體間違ひないことでありませう。彼は斯様な事を言ふのである、

吾等の勢力といふものは次第に衰延して、終には全世界を一擧にして弱らしてしまふものである。

そのことに就て蛇の頭と尻尾が結びついたらどうぢやといふことを彼は言ひます、えらいことを言ひます。

蛇の頭と尾が結びついた時は、全歐羅巴は頑丈な箱で締めつけられたやうになるであらう。

蛇の頭と尻尾とが結びついて、ゲルツと捲いてギユツと締るといふ、この頭と尻尾が兩方面かぬ時には蛇の力が餘り無いが、これが一寸でも三寸でも尾と頭が捲つてやうになつてギユツと締めたらどうぢや、斯う言ひ居るのである。さうしてその蛇の頭と尻尾が結びつくや否やは、一に係つて日本人の態度如何に在ると彼は言ふ、成程西は浦鹽の突先きまで来て、朝鮮、支那、西伯利、それから佛蘭西、英吉利と行つて、東は海を越えて亞米利加まで取捲いて居る。唯日本の本土に居る大和民族がボルシエヴィズムに感染せぬだけである、これが感染した時は世界を一周して蛇の頭と尻尾が捲つ

いて結びつける、斯ういふやうに今日はなつて居る。私の觀察する所では、西洋各國何れもその基礎の安全なるものは一つも無いと斷言したい。この點は、私深く信じて居る、洵にお氣の毒に思ふのでありますが、如何とも仕方がない。モウ支那などは申すに及ばぬ、危いものである、英吉利も佛蘭西もみな危いものである。我國も今日のやうに政治上から自由主義を唱へて、デモクラヘモクラ言うて居れば、丁度ボルシエヴィズムが来てやり易いやうに下拵へをして、お出で下さいと言つて居ると同じである。又労働運動のストライキが合法であるとか、ストライキが神聖であるとかいつて煽てるのは、丁度ボルシエヴィズムの傳播し易いやうな手に乗つて居るのである、それは英吉利でも亞米利加でも皆さうやつて来て居る。近頃少しは氣が附いたけれども、何しろ元から生理學で學び、經濟學で學び、進化學で學び、社會構成の原理で學んだ、間違つた學問をして、それが病的になつて居るものであるから、丁度小さい時から念佛宗の信者であつた者が改宗しても、何か大事の場合に愈々となると、「南無妙法蓮華經」と言ふべき時に「南無阿彌陀佛」が出て来た

りするやうなもので、種がさうなつて居るから、直きに生地が出て来る。日本の政治家でもやはりその傾きがあると思ふ、えらさうな事を言つて居つても、昔自由黨などと云つて居つた事があるから、「民権自由」といふ様な言葉に對すると直き參つてしまふ、今政友會が民心の悪化を防ぐと言ひ居るけれども、「自由」といふ言葉が來るとビリ／＼とすると、「吾々も自由主義ぢや、民権の自由御尤ぢや」と言つて段々後退りしてしまふ。そこで踏張つて、「イヤ吾々も自由といつたけれども、今研究すると彼の言葉は必ずしも善くなくつた」と言つて押返すだけの達人は餘り見當らない。「民権の自由といふことは通り相場だから仕方がない」……労働運動に就ては「ストライキは合法ぢや」……ストライキが合法でないナンと言へば民衆の敵と言はれるから「ストライキは合法ぢや」と言ふ、左様な事ばかり皆やつて居る。さういふやうな乗せられた學說、乗せられた思想の内に居る西洋は、これは皆モウ危いものである。又其の西洋を崇拜するのみに傾いたら、日本も同じ結果を見るに至るものであると私は斷言します。そこで彼の勢力は實に侮るべからざるものである、之を輕

きに見るのは非常な間違ひである。私は先般の巴里に於ける講和會議に就ても、一番其の點が大きな問題だと實は思つて居りました、それで添田博士が巴里に行かれる時に、色々自分の考を忠告して呉れといふことで、それ／＼先輩の人が政治上或は世界政策の上にと就て話がありました、何れも結構な注意をして居られました、私はどうもこのボルシエヴィズムの傳播が容易ならぬと思ふ、巴里で會議を開く頃どういふ形勢になるか、各國のボルシエヴィズム傳播の状況に就て十分の考察を願ひたいといふことを申して置いた。博士が行かれる時分にはそんなボルシエヴィズムの話ナンといふものは餘り無かつた、やはり世界の政治關係がどうだ、講和の上に於てどうだといふ話が非常に多かつたが、添田博士が歸つて来て報告する時には、他の事は何も言はない、「他の事は分りはしませぬ、向ふの國の人それ自身が分りはしませぬ、唯明白なのは労働者が跋扈して、このボルシエヴィズムの思想の傳播の偉大なることは驚歎すべきであります」と言つて居る。それを非常に熱心に言はれて居る。眞に西洋の事實に於て、他の政治思想がどうぢや、ストライキが合法ぢや……そ

んな事は舊臭い、何でもない事である、そんな事は今頃言ふ必要はない。唯戦後に現はれて居る恐るべき事實といふものは、このボルシエヴィズムの傳播である、之に備ふる所が無かつたならば、世界は擧げてやられてしまふといふ、この事實が戦後に於て着目すべき唯一の事柄であると私は信じます。

ボルシエヴィズムは左様な大勢力を以つて蔓延しつゝあるものである。さうしてその目標は今申す通り、蛇の頭と尻尾とが結びつく邪魔をするものは日本だけだと言つて居るのであるから、どうしてもこの頭と尻尾を結びつけるが爲めには、日本の一角を削さうといふことに努めて來ます。是は黙つて居つても掛かつて來ます、「大きい聲で言つたら怒つて餘計來ると怖いから餘り言ふな」といひますけれども、黙つて居つてもそんな事に遠慮するものではない、「彼奴は黙つて居る、可哀相だから控へてやれ」といふものではない。言つてもやる、言はなくてもやる、既に彼等は戰を宣して居る、「必ずやつて見せる」といふのであるから、こつちは「やらさぬ」と言ふのは當然である。向ふが戰を開いた以上は「必ず破つ

のである。今の文明人と稱する者は唯權利ちや、義務ちやといふやうな事ばかり言つて、斯の如き狂暴なる敵が現はれて社會を破壊せんとし、國家を破壊せんとして居ることを忘れて居るといふのは、世界を通じての大暗愚といふものである。それ故にボルシエヴィズム宣傳の眼から見たならば、これを「自稱文明人」と嘲けて居る、「彼等酒に耽り色に耽り奢りに耽つてその他を知らざる所の暗愚なる文明人よ」と言つて居る、そうして又「吾々の言ひ聞らしたる事を口眞似する輩よ」と言つて居る。斯の如き侮辱を過激派から受けることに於て、實に文明人は大反省をしなければならぬ。世人は「イヤそれは作り事ぢや」といつて反對する人もあるけれども、作り事ではないと思ふ、事實黨の口眞似たやうな事を盛にやつて居るやうに思ふのであります。

それ故に彼等が一齊に恐れるのは賢哲の出現であります。世間並みの事を言うて居る者などは何とも思つて居らぬ、科學の議論だの、經濟學の議論だの、法律の議論だのといつたならば、モウちゃんと原理原則が自分達に都合の好いやうに拵へてある、「彼奴はこつちの者だから言はして置け」といつ

て見せる」といふ、「破らさぬ」と言ふのは當然ぢやないか、「それでも破つて見せる」「イヤどうしても破らさぬ」と言はなければならぬ。それを「まあ餘計な事を言はないで、破つて來ても仕方がない、小さくなつて居れ」……そんな馬鹿な事はない、どうしても國民は皆衆を擧げて「破らさぬ」といふ勢を示して行かなければいかまいと思ふ。彼等の如き狂暴なる奴に遠慮などしたつて可哀相とも何とも思ひはせぬ、愈々彼等は狂亂して如何なる残忍酷薄なる事でもやる。彼が勢力を得た時如何なる事をやつて居るか、慘殺をするやうな事は朝飯前のことである。彼はその事を言ふて居る、「少しでも遠慮してはいかぬ、この事に就ては、昨日まで自由々々と言つて、翌日直ちに虐殺を行ふといふのは餘り變化が激しいじやないかと聞かれたら何と答へやう」といつて或る黨員が騒いで居る、昨日までは自由を盛に主張して置いて翌日は虐殺をやるといつたならば、餘りに表裏が激し過ぎると質問する者があつたら、吾々はどう答へるかと言つた時に、「そんな事は答へる必要はない、そんな質問をする奴があつたら直ぐ刺し殺せ」と言つて居る、それが答辯である、實に狂暴なるも

て喜んで居る。唯この文脈を造り爲したる根本の陰謀——陰謀と言はなくともその一切の根本の原理原則が間違つて居るといふことを看破する、經濟學の原則を打破して掛かるやうな大識見、政治傾向なら政治傾向の東西に押寄せて居る總ての傾向を根本より看破する大識見に立つて行く者でなければ、このボルシエヴィズムの運動に對抗することは出来ないと言つて居る。彼は賢哲のみ恐ろしい、他のパイ／＼の學者、パイ／＼の政治家などは皆な我黨であると言つて居る。その言葉を御紹介するならば彼は斯う言ひます、

天才或は賢哲は吾人が紛擾を植付けたる幾千萬の民衆よりも一切の大事業を爲し遂げることが出来る。

それであるから一番恐ろしいものは賢哲である。吾々が永い間掛つて擧げた群衆幾千萬人よりも一層の大事業を爲し遂げる力は、賢哲が有つて居るのである。我黨の注意すべきは賢哲である、故に賢哲に對する所の尊敬を失はずやうな風にやらなければならぬ、孔子が偉いナンと言ふ奴があつたならば、「馬鹿な事を言へ、孔子などは話らぬ」斯うやれ、日蓮が偉いと言ふ奴があつたならば、「日蓮が何だ、あんな坊主は駄

目だ」とやれ、斯ういふ思想を盛んに鼓吹して、さうして一面には人の尊敬を受けさうな人の私事を發いて、其の人を不名譽の地位に陥れ、或は雜語を手に入れ、新聞を買収して、頭を擧げさうな奴を皆葬むつてしまはんければいかぬ、總てを平凡化して、デ、モク、ラ、ヘ、モク、ラ言ふやうにしてしまへと言つて居る。果せる故今日は左様にして偉人の出現といふものを許さぬ、必ずやさういふものがあつたならば、有ゆる方面からこれを倒すべき運動を起す。これも亦やはり時代の風潮として、過激派の爲めにしてやられて居ることであらうと思ふのである。

左様にして實に彼等の主義といひ、勢力といひ、方法といひ、目標といひ、實に恐るべき意味があるやうに私は感ずるのであります。

(未完)

國民の覺悟

陸軍大將 大迫 尙道

本夕茲に皆様にお話を致しますことは、私の洵に光榮とする所であります。私は、元來斯様な演壇に起つてお話をすべき身でないのではありませんけれども、今日の狀況、誠に憂ふべき時機ではないかと思ひますので、不肖を顧みず斯様な所に出て所見を述べる次第であります。それは實は皆様に御相談をするのであります。今日この儘にして置いて宜しいか、或は吾々は起つてこの日本を救はなければならぬか、この御相談をするのでありますから、どうか私の話します間に於ては手を叩くことは止めて戴きたい、さうして若し不同意の事があつたならば私の述べる所を十分攻撃をして戴きたいと思ひます。さうしてお互に思想を洗練して、本當に日本の爲めになる所に結着を附けて行かなければならぬ、斯様な精神を以て皆様に御相談をするのであります。

それでは先づ吾々個人の立場を考へますと、己れ一人この世の中に立つことの出来るものではないといふことが土臺になります。して見ると日本は日本一ヶ國と考へて居る譯には行きませぬ。外に世界に澤山の國がある、是れとの關係は如何なるものであるかといふ事が大事であると思ひます、それ故に問題が少し大きくなりますけれども、世界の大事といふことから先づお話ししたいと思ふのであります。

戦争前にはこの地球上に獨立を成して居る國が五十四ヶ國ありました、今度の戦争で歐羅巴の中央に六つか七つの新しい獨立國が出来ましたから、今日は約六十の獨立國があると思ふ。この六十ヶ國の中五十ヶ國といふものは歐羅巴人種の國であります、唯僅に残りの十ヶ國といふものが、吾々の如き色の附いた人種の國であります。人口の上から言ひます

庚申七月盡夜東海車中偶得

櫻溪 仙史

(其一)
『劍々復結束、霹靂鳳山房、三泉往來客、度生濟世行、天風八萬里、陣々車窓涼、月在芙蓉上、光明照十方』

(其二)
『長蛇橫海走、明月印波間、水底玉兔跡、群魚爭上山、奇觀絕妙々、此處辨天灣、遺像無迦葉、乃公獨敬顏』

庚申七月念九日野口何處子

贈予烟草來賦之表謝意

『君贈予煙草、登仙稽古時、吸霞未得術、姑喫烟開思』

品川妙國寺掛錫中所得、再

似何處子

『寺門如太古、老木影玄々、急雨伴風到、松花落破甃、吸霞我得術、自覺化禪山、多謝且多謝、詩魂已上天』

と世界の人口が十七億あります、その三分の一が歐羅巴人種で三分の二が色の附いた人種であります。さうしてその色の附いた人種の中の半分といふものは、歐羅巴人種の支配を受けて居る、人口の數に於ては彼等に倍の人口を持ちながら、その半分といふものは彼等の支配を受けて居るといふのは、海に悲しい次第ではないかと思ひます。さうしてこの十ヶ國の中で本當に獨立をして居る國といへば先づ支那と日本であります、支那は御承知の如く内部の一致和合が出来ず、今日も争うて居るやうな有様である、唯我が日本だけが完全なる獨立の形を成して、今度の平和會議には世界五大強國の一として參列するの光榮を得て居るのであります。

これはお互に定に誇り且つ光榮としなければならぬ所であり、五十年前には殆ど世界に知られなかつたこの日本が、僅に五十年の間に於て世界の五大強國の一となり得たといふのは、非常な不思議な成績であります。何故に斯様な不思議な成績を得たかと云ひますと、私は之れを皇室の御威光、御後威に依る國體の然らしむる所であると結論するのであります。何故かといへば、明治天皇の御事業の中には數

持つて居つた所の領地を天皇陛下にお還ししたのであります、斯様な御事業が而も平和の間に行はれたといふのは、即ち日本精神の精華の在る所であると思ひます。斯様な御事業といふものは歐羅巴では決して出来ませぬ、權利々々といつて權利を重んずる所の國に於ては決して出来得べからざることであり、所が日本では國家の爲めには財産も生命も犧牲に供するといふ、實はしい立派な精神があつたが爲めに、平和の裡にこの大革命が行はれたのであります。之れを考へて見ますと、若し假に上に御皇室があらせられなかつたとして見ましたらどうでありませうか、各大名が相互に争うて、その戦闘といふものは數十年に亘つたであらうと思ふのであります、それが平和の裡に行はれたが爲めに、日本國民といふものはこの戦ひの慘害に苦しむことなく、斯様な大事業が行はれたのであります。即ち陛下のお爲めといふ觀念に依つて、斯様な幸福を日本國民といふものは受けることが出来たのであります。それから日清戦争、日露戦争、これは言ふ迄もなく上元帥より下一兵卒に至るまで、陛下のお爲めには悦んで生命を捧げるといふ軍隊の精神が一つに纏つて大なる

多偉大なる御事業がありますが、最もその主なるものを擇んで見ると、御維新の御事業、廢藩置縣の御事業、日清戦争、日露戦争、この四つであると思ひます。御維新の御事業は僅か一年足らずの間に、この日本の大革命といふものが終りを告げたのであります。何故に斯く短日月に於て平和に改革が出来たかといふと、敵も味方もその心の奥底には「天皇陛下のお爲め」といふことが確にあつたのであります、そこで「君も天皇陛下のお爲めであつたか、僕も天皇陛下のお爲めであつた」といふので一致點を見出して、大體平和に行はれたものと思ふのであります、即ち天皇陛下のお爲めといふ所の、この天皇陛下の御後威といふものに依つて、斯様な統一の御事業が出来たものと私は斷言するのであります。それから第二の廢藩置縣、これは人が餘り氣が付きませぬけれども私は、明治天皇の御事業の中の最も大きな御事業であると思ひます、御承知の如く昔は各大名が各々國を領して、その國に於て政治を行ひ、兵備を蓄へて、殆ど獨立の形を成して居つたのであります、一と度藩を廢し縣を置かれるといふことになり、各大名は悦んで自から進んで今まで

働きを爲したのが爲めに、この偉大なる成績を擧げることが出来たのであります。それ故に大山元帥、東海元帥が戦ひに勝たれる度に、「陛下の御後威に依りましてこの戦争にも立派に勝つことが出来ました」といふことを上奏されて居るこれは決してお世辭ではない、眞に陛下の御威光に依つて數十萬の軍隊が命を捨てるといふ、茲に偉大なる力を現すことが出来たのであります。斯様に考へて見ますと、吾々が御皇室に負ひ奉つて居る所の御恩といふものは非常な大きなものであります、恰も太陽が吾々に及ぼして居る所の恩を、日當押れて居つてその恩を感じないが如き有様のものと思ふ、假に太陽が無くなつたらどうでありませうか、地球上にありとあらゆる生物といふものは皆死滅してしまふでありませうか、毎日受けて居る所の太陽の恩といふものは、深く氣が附かずして受けて居るのであります。御皇室の御恩は決して氣が附かぬといふことはありませぬけれども、餘り偉大なるが爲めに能く考へて居らぬという、どうかすると間違つた思想を持つ者が今日はあるのであります。それ故に吾々は益々この御皇室を尊び、

これを仰ぎ敬いて、さうして六千萬の臣民が献身的に此處に集まつて、初めて日本國の偉大なる力となつて、吾々は今日世界に於ける五大強國の國民として名譽を得、誇れることも出来る所の幸福を得、又各自の自由も權利も生命財産の安固も、この國家の力に依つて保障せられて、安らかに暮すことが出来る次第であります。

それからこの御維新以後五十年の間に、日本が世界の舞臺上に於て如何なる働き、如何なる役目を勤めて居るかといふことを考へて見ますと、非常に大きな働きを爲して居るのであります。即ち今度の世界に於ける大戦争は、日本が強くなくなり、日本が勃興したが爲めに起つたと言へるのであります。

先づ日本の統一が出来ますというのと、相當の力が附いて、さうして日本と支那の戦争といふものが起つたのであります。この戦争に依つて支那の實力といふものが歐羅巴人に分つたのであります。支那が左程強くないといふことが分るといふと、忽ち歐羅巴人の勢力が支那に向つて流れ込んで來ました、御承知の如く明治三十年には獨逸がその宣教師が一人殺されたといふことを口實として、膠州灣を占領したので

以て支那の内地にも及ぼし、又朝鮮半島にも及ぼす有様でありました。若し朝鮮が露西亞の範圍に入るといふと、最早や日本の獨立は獨立の甲斐がないので、恰も劍をどてつ腹に突付けられたが如きもので、否應なしに彼の命令に服従するより外ない有様になつたのでありませう、それ故に當時の露西亞は世界で最も強國とされて居り、獨逸と雖も彼れ一ヶ國を以て露西亞に對して宣戰するだけの勇氣は有つて居らぬ位の強國と恐れられて居つた國でありますが、この露西亞に向つて小つばけな日本が宣戰をしたといふことは、實に不思議であります、この明治天皇の御英斷を吾々は深く感謝しなければならぬと思ひます、若しこの御英斷が無かつたならば、今日は朝鮮は無論露西亞の範圍に入つて居るし、吾々と雖も果して獨立の體面を保ち得たか否やといふことは、疑問であるのであります、而してその當時の明治天皇の御心中の御心配といふものは如何程でありましたらうか、斯様な敵を引受けて果して日本が勝を得るか否や、斯うお考へ遊ばした時には如何なる御心配であつたらうかと恐察する次第であります。斯様な御英斷があつたが爲めに、我國は今日五大強國の

あります、膠州灣は青島のある所の支那の有名な港でありました、露西亞は滿洲を横斷して瀋陽に通ずる所の鐵道を敷設し又日本から運付させた所の遼東半島——今日の關東州を彼れ自ら占領してしまつた、さうして治爾賓から鐵道を旅順に敷いたのであります。この遼東半島は如何なる歴史を有つて居るかといふと、皆様御承知の如く、吾々の先輩者が血を流して正當に得た所の土地であります、之れを將に條約締結をせんとする時に、露西亞、佛蘭西、獨逸が同盟して日本に抗議を申込んだのであります、當時の日本の國力は到底この三國を敵手として戦を開くことが出来ませぬに依つて、残念ながら涙を吞んで彼等の要求に従つたのであります、斯様な歴史を持つて居る所の土地を、露西亞は平氣な顔をして取つてしまつた、實に今から考へて見ても残念至極であつた、國が弱ければ彼等は斯様な横暴な事をするのであるから、之れを吾々は能く頭腦に入れて置かなければならぬ、決して日本ばかりの國ではない、外に吾々を侮辱し吾々を屈伏せしめやうといふ國が澤山あるといふことを、始終頭腦に置いて居らなければならぬ、さうして露西亞は滿洲に勢力を張り、その勢力を

一となり得て居るのである、して見るとこの明治天皇の御英斷といふことは、吾々が永久に頭腦に深く刻み込んで、感謝して居らなければならぬことであると思ひます。それで日清戦争以來歐羅巴の勢力が支那に向つて流れ込んで來、殆ど支那は當時分割されさうな形にまで陥つて居つたのであります、日本が露西亞の鼻つ柱を挫いたが爲めに、初めて支那の領土の保全を得ることが出来たと思ふのであります、素より支那と日本の利害關係上一致した所からして、日英同盟といふものが出来ました爲めに、支那領土の安全も保障されましたけれども、一方から考へて見ると、日本の勢力に依つて彼の鼻つ柱を叩いた事が、主なる實際の原因であります。

そこで日本が露西亞に勝つたが爲めに、露西亞の實力といふものが獨逸の皇帝の頭腦に映つたのであります、獨逸人は豫て世界に於ける最も優秀なる國民と自ら自惚れて居る國民でありまして、機會があつたならば歐羅巴の盟主となり、その勢力を以つて亞細亞を壓し、世界を統一しやうといふ野心を持つて居る所に、露西亞の勢力が分りましたので、爾來着

々その準備を怠らず、恰も當時地利の皇太子並に妃殿下が暗殺されたのを口實として、今度の戦争が起つたものであると私は感ずるのであります。若し日本が露西亞を撃つことがなかつたならば、今度の世界の大戦争も起ることはなかつたであらうと思ふ。して見ると今度の戦争は確に日本が勃興したが爲めに起つたといふことも、一部分の眞理はあると考へます。日本は新様な大きな仕事を世界の歴史にやつて居るのであります。これは皆國民の一致團結、さうして陛下の爲めには身命を擲つて働くといふ所の力が固まつて、初めて斯様な成績を得たのであります。

而して今度の戦争に於ては、殆ど世界を顛覆へす位の大變動を起したのであります。思想の上に於ても、經濟の上に於ても非常な變化であります。さうして歐羅巴に於ては非常な損害を受け、負傷をして居りますので、暫くは彼等は此の恢復に時間を費すであります。又先刻申し了所の歐羅巴の中央に出来た小さな國が澤山ありますから、これが利害の争ひを暫くの間はするであります。それが爲めに歐羅巴内地といふものは暫くは安定を得ることが出来ず、手を束ふことを考へずして、自分の利益の爲めに、騒いで居るやうな有様であります。私はこれを人心の腐敗といふのであります。人心の腐敗が茲に導いて來て居るのであります。

これは少し借越な言ひやうでありますけれども、私は何時でも新様な平凡な問題を出すのであります。人間といふものは神に近くなければならぬものであるか、或は畜生に近くなければならぬものであるか、洵に平凡な知れ切つた問題であるが、三尺の童子と雖も、人間といふものは畜生に近くなるべきものぢやない、神に近くなるべきものであると言ふであります。けれども今日の實際の有様を見ると、確に神に近くなるより畜生に近くなりつゝあるのであります。何故畜生に近くなりつゝあるかという、人はどうでも宜しい、自分さへ良ければ宜しいといふ所謂西洋思想、權利利益の方の精神が旺盛であつて、さうして國家の爲め、世の爲め、人の爲めといふ精神が薄れて來て居るのであります。我慾、我利といふことは、畜生の性分であり、自分の利害は捨て、も國家の爲め、世の爲め、人の爲めといふ所に人間の價値があるのであります。日本の該に「人を見たら泥

洋に伸ばすだけの餘裕を得ることが出来ぬであらうと思ひます。若しこの機會に於て日本が一致團結して進歩發達して行きましたならば、洵に斯様な好機會はなからうと思ふのであります。日本は確に世界に於ける優秀な國となり得るのであります。併しながら若し誤つて彼等の眞似をして、今日の如く内地に於て喧嘩をするやうなことでありましたならば、是れは自滅の外はないであらうと考へる。斯く考へて見ると、今日は非常に良くなるか或は潰れるかといふ岐れ路に在ると考へます。

而して今日の我が周圍の有様を見ますと、西伯利に於ては皆様御承知の如くまだ戦ひをして居る、支那に於ては日本を排斥する、朝鮮に於ても動々もすれば獨立をせんとする形であり、又亞米利加に於ても日本を排斥する、濠洲に於ても同様であります。日本の周圍みな我に同情を表して居るものは殆ど無いやうな形に在るのであります。これは外患といはなければならぬ。新様な状態に在りながら我が日本の内地を見ますと、互ひに己れの利益、權利といふことを考へて、世界の大勢に對して日本國は如何なる有様であるかとい

柄と思へ」といふやうな事がありますが、これを言ひ換へて見ますと「自分を見たら畜生と思へ」といふ言葉になるのであります。吾々は斯様な該の如き社會を造つてその中に暮すべきものであるか、否、吾々は「人を見たら佛と思へ」といふやうな立派な社會を造り、人を信じ、人からも信ぜられて、麗はしい一生を送るやうにこの社會を造つて行かなければならぬものであると思ふのであります。所が今日の有様は確に佛の世界を造らずして、畜生の世界である、喧嘩腰で互ひに對して居る、斯ういふ有様では吾々は洵に不愉快に一生を暮さなければならぬのであります。

何故に古來は立派な精神を持つて居つた日本人が、斯様に淺ましい有様になつたのかといふ原因を探ねて見ますと、私は明治初年の教育の誤りが今日の缺陷を來して居ると思ひます。明治初年に政府に立つた人といふものは、所謂武士道に精神を陶冶された所の人であつて、精神の方面に於ては立派に出来上つた人である、自分が出来上つて居るから、將來の日本人も必ず斯様な立派な精神は失ふものではないといふ考から、教育をするのに精神に重きを置かず、道徳に重

きを置かずして、西洋の文明たる所の科學の知識だけを教へることに汲々したものと思ひます、即ち日本人の道德の根底を爲して居る所の漢學を廢し、又佛教もこれを廢した所が澤山あるのでありまして、當時佛教を廢した所は先づ水戸、土佐、鹿児島、或は大和も確かさうであると思ひますが、明治政府を形作つて居る所の當局者は主にこの佛教を廢した國から出て居るのである。新様な有様でありましたから、佛教といふものは一時は殆ど眼中に置かれぬ位に輕蔑されたので、現に吾々の頭腦に於ても、佛教は何にもならぬものである、愚夫愚婦のやるべきものであるといふ觀念を持つて居つたことではありますが、これは洵に誤つたと今から感ずるのであります。又昔の日本の學問といふものは、學問といへば殆ど道德修養の學問であつたのでありますが、是が全く一時廢れてしまつて、物質的の方面の教育だけを施したのでありますから、人間の根柢といふものが出来なかつた、人間は心といふものが土臺となつて、さうして知識學問を得たならば、その得た所の知識學問が善い方に働くのであります、然るに道德上の根柢を作らずして知識學問を興へたから、その折角

得た所の知識學問といふものは、悪い方に働いた、私はこれを心が主人公となるべき所を心が知識學問の奴隷となつた心が知識學問を過度に使役して行かなければならぬのが、却つて反對に心が知識學問に使はれるやうになつたと云ふのであります、即ち心が留守になつたのである、心が主人公でなければならぬのが、心が奴隷になつてしまつたのであります、それで佛教に言うてある如く、眞直な棒の影は眞直に映り、曲つた棒の影は曲つて映るやうなもので、正しい心を有つて居る人の言語動作は正しく出ますが、曲つた心を有つて居る人の動作は惡に現はれて来る。心といふものは見ることが出来ないけれども、その人の言語動作を始終注意して見て居ると、その心の善惡といふものは確かに見ることが出来るのであります。(未完)



佛教信仰の正統

本多日生

第八 二世を貫く信仰 (二)

以上は法華經の樂章論品の經文を御紹介したのであるが、尙ほ私は阿含經の中に於てこの點を一層明確にして置きたいと思ふ。私が色々阿含經を調べた所に於ては、その證據が餘りに明白で、一點議論の餘地が無いと考へるのである。それは『中阿含經』の十五の卷に出て居りますが、釋迦が何時も話をする中には何ものが善き事柄であるか、何ものが惡しき事柄であるか、何ものが罪であるか、何ものが徳であるか、又何ものが現世の爲めになることであるか、何ものが後世の爲めになることであるかといふ問題を擧げて、斯うすれば現在生活が幸福になる、斯うすれば後世の生活が幸福になるといふことを、何時でも説いて居るのである。丁度今云ふ何ものが善き事なるか、何ものが惡しき事なるかと云ふことが、何時も問題になる如くに、何ものが現世の爲めになり、何

のが後世の爲めになるといふことは、何時でも説かれたことである。それはさうあるべき事で、偉大なる宗教を聞くには、現在だけの爲めだとか、未來だけの爲めだとか、そんなボンヤリした頓聞な頭で、逆も偉大なる宗教を聞く事が出来るものではない。釋尊ともある大哲人大偉人が、左様な淺薄な事を説く譯がない、又當時印度は非常に思想の進歩して居つた國で、婆羅門の教が九十六派に分れて、互ひにその優劣を争うて居る中に釋迦が出て、さうして九十六派の婆羅門を悉く切り従へて、佛教を打立てたのであるから、その議論は非常に整うて居つたといふことを信じなければならぬのである。故に『釋阿含經』の四の卷には、釋迦が舍衛國といふ印度第一の文明の開けて居つた所で、給孤獨國といふ波斯匿王が建てた講堂のある所で説教をして居る時に、年の若い婆羅門の辯論といふ者が來て釋尊にお尋ねした。

世尊よ、俗人にして家に在るもの、當に幾法を行じて現

法安及び現法樂を得べきや、又幾法を行じて後世安、後世樂を得べきや。

どれだけの事を致したならば、現在生活の幸福が得られますか、どれだけの事をしたならば、後世の生活が幸福でありますかといふ事を尋ねて居る。そこで若し佛教は未來だけだとか、現在だけだとか云ふことであつたならば、俺は未來のこととは知らんとか、現在のことは政治家に聞けとか言はれる筈であるけれども、釋迦はさうは言はない。直ちに斯く／＼すれば現法安を得、斯く／＼すれば後世安を得るといふ事を、ズツと擧げて述べて居る。その時に釋迦は、四ツの事をやれば、現在生活の幸福が得られるといふ事を説いた。それは(一)方便具足、(二)守護具足、(三)善知識具足、(四)正命具足であります。方便具足といふことは、生活をするに就て最も最善を盡したる方法を撰んで、それに熟達せよといふことである。生活をする所の最善の方法といふのは、例へば大工に成るのが一番宜いと思うたならば、大工の業を一生懸命學んで、大工になる、學問を以て身を立てやうといふ者は、その學問に成功して大學者になつて行く、それが方便具足である。その方便具足の内容を釋迦が説いて、大工とか左官とか云ふやうな「種々の工巧」或は田を植へ商賣をし、或は政治

家となり、或は學者となり、算盤を持ち色々の仕事をするのであるが、大體それには精勤と言つて、精を出して勤めなければならぬ、今の意業の反對である、さうして各々自分に適したものを撰んで、それに依つて生活して行くといふ事が方便具足といふことになる。釋迦の教といふものは、今日文明人が考へても反對の出来ない眞に理の詰んだ事しか説かれない、今の馬鹿坊主みたやうに、お参りをしてお賽銭でも上げて居つたならば商賣が繁昌するとか、お堂の砂を袋に入れて持つて歸つたならば商賣が繁昌するとか、そんな馬鹿な事は釋迦は言はぬ、左様な事を言ふ者を皆な之れを迷信と説かれて居る。であるから第一には今申したやうな方便を備へて行かなければならぬ。第二には守護具足、それは得たる錢を守つて行く方法で、儲けたからと言つて宵越しの金は持たぬと云ふやうな事を言つて、バツ／＼と使つてしまつたならば駄目である。であるからその得たる金の使ひ方といふものが大事である、大體釋尊の立てられた法式は餘程嚴密なもので、一個月に得たる利益の四分の一を以て生活をせよと言つて居られる、それからあとの四分の一は貯蓄して不時の災難に遭つた時の用に充てるが宜い、殘る四分の一は資本金に加へて、益々商賣を發達させなければならぬとある。これは主に商人

に就て言はれて居るのであるが、さう云ふやうな講で、儲けた錢を失はぬやうにして行かなければならぬ。それには泥棒に奪られぬやうに、火事に遭はぬやうに、自ら無駄づかひをせぬやうにして行かなければならぬ。銀行に預けるには能く調べて性質の悪い銀行などに預けてはいかん。(この時分既に印度には銀行がありました、印度は中々進んで居つたものであります)それから年寄に金を預けるなどいふ事もある、親切なやうでもお爺さんは死んで行くから、死んだ時にその錢の行衛が分らなくなるから「老人に委託すべからず」といふ事も言うて居る。左様にして錢の事を餘程大切に言はれて居る。又酒を飲んでではならぬといふ事がある、それは酒を飲むと錢が減るといふ、六損財業と言つて、六つの事が財を損する行爲であるといふ事を非常に詳しく説いてある、第一酒を飲むと、博奕を行つたり、芝居や活動寫眞ばかりノラクラ見に行くといふやうになる、左様な事ばかりして居ると身上が持てんと云ふことがチャンと書いてある。この六つの事柄に各々六つづゝの失を擧げて、三十六の普通生活の心得が説いてある。その三十六は大抵の家庭の爺父にでも、女房にでもピシツと當て嵌る事ばかり説いてある、實に立派なものである。茲に一つお經の文が擧げてありますけれども、それを説

いて居つても長くなるから略して置きます。それが守護具足といふことである、で「六損財業」といふのは、守護具足の反對を説いたので、博奕を打つたり酒を飲んだり、ノラクラしてはいかぬ、何處迄も金を溜めて生活を幸福にして行くが宜しいと云ふのであります。それから第三の智識具足といふことは、人生は唯だ金ばかり溜めてはいかん、人格の修養が伴はなければその人の幸福は無い、人格といふものを除つては、金ばかりで決して幸福といふものは來ないのである。それを今の文明の人々は忘れて居る、如何に富豪に成つたからと言つても、金で得られる幸福といふものは限りがある、どんなに大きい別荘を建て、金に困らんと言つても、それが決して幸福なものではない。その別荘の奥座敷に絹の布團を敷かせて寝た時、頭の中に何が出て來るか云ふと、色々な心配の事が現はれて來る、その心配を通り越して欠伸が出て來る、欠伸が通り越して眠つてしまふ、眠りが覺れば又心配である。それでは何にも成らん、頭の方に色々な精神的な活の力が興へられて居れば、如何なる場合にも精神の内部から喜びといふものが滾々と湧いて出て來るやうになる。それは何に依つて得られるかと云ふと、所謂善智識の教化を受けなければならぬ。これは富める者も貧しき者も、社會の幸福

といふことの爲めに智識に近づき、その教を聴かなければならぬ。善智識は豫め人の心配をしないやうに、その心に力をつけるものであり、心配が湧いて来た時分にも智識に依れば之れを除いて貰へる樂は之れを生ぜしめ、未だ得ざるの樂は益々之れを殖やす事を教ゆるものである。即ち善智識のよき教化を受けて信仰すれば、如何なる者でも眞の幸福を味ふことが出来るのである。それから第四に正命具足といふ事は、生活の上で道徳の事を行はなければならぬと云ふのであつて、人間は唯だ生活をしたのみではいかぬ、金を儲ける目的が、最後は正しい意味の生活に這入つて、その金の力で社會事業を起すなり、宗教を助けるなり、國家に盡すなり、親類の者を世話をするなり、自分の力が餘つたならば、他の者に幸福を與へるやうにして行かなければならぬものである。それには無論自分が贅澤な生活をしてはいかん、入るを計つて出るを制し、さうして金が餘つたならば、餘つた金を意義ある事に投じて行くといふことが人生の目的である。唯だ、金を儲けたい儲けたい」と言つて、儲けた金を積んで置くだけでは、何の爲めに金を儲けて居るのか分らん。積まれた金は意義ある事に使はなければならぬ、無益の事に使ふ金を減らして、意義ある事に使ふといふ事が正命具足と云ふことであ

ふやうな切れ端の一部分のみに説いたものを信するから、阿彌陀様を信心すれば死んだ先きが樂になるとか、不動様を信すれば火事に遭はぬとか、鬼子母神を信すれば子供が出来るとかいふやうな、下らぬ事になる。釋迦如來の如き偉大なる人格を奉ずれば、現法安、後世安で、智識の上にも道徳の上にも、あらゆる事柄に於て我が師となつて下さるのであるから、この釋尊を大切に信ぜよといふのが佛教の信具足といふことである。それから戒といふ事は道徳であつて、色々佛が戒められて居る、惡を止めて善を爲せよといふ教訓がある、それを守つて行くので、大體は世間の道徳から這入つて居る。佛教は別に詰らない事を色々云ふのではない、當時印度の社會に行はれて居る道徳を尊重して居るのである。日本で申せば國民道徳、又今日に於て時代に適應したる色々な道徳を尊重することが戒具足である。それから第三の施具足といふ事は、特に注意すべきことで、これは佛教を信する限りには、各々分に應じて必ず施しといふ事をしなければならぬ。富める者が施すのは無論であるけれども、貧しき者でも唯だ貰ふばかり、要求するばかりではいかん、如何なる貧しき者でも、施しといふ心を持たなければならぬといふことである。貧女の一燈と言つて、何も持つて居らない貧乏人が髮

る。然るにさういふ理想を持たないで、唯だ得た金を無益な事に使つてしまふのは、恰も花が咲いて實がならないやうなものである、經文には蓮の華に實の成らない奴もあるが、それと同じものだと言つてある。日本で言へば山吹の花みたやうなもので、金を溜めたと言つても有益に使ふ途を知らなければ、山吹の花が咲いたばかりで散つてしまつて、實が一つも成らぬと同じ事で何にもならぬ、唯だ錢を持つて居るといふだけの話であるといふ事を、正命具足といふ意味に於て懇々お説きになつた。さうして仰せられるには、先づこの四つの事が實行出来たならば、何人でも現在の生活が幸福になるといふことを保證せられました。

それから後の世の幸福といふ事に就て、又四つの事を説かれましたが、これは詳しくは申しませんが、唯だ簡単にその名前を擧げて置きます。それは信具足、戒具足、施具足、慧具足といふ事でありませぬ。この信、戒、施、慧といふ四つは如何なる意味かと云ふと、第一は信仰である、その信仰といふ事は佛様に對して起る信仰である、今日の信仰のやうに帝釋天に向ふとか、冥理窟に向ふのではない、偉大なる釋迦牟尼佛を戴いて、釋尊の心を以て心とし、釋尊の御教に隨ふと言ふ信佛の觀念である。阿彌陀如來とか不動明王とか、さうい

の毛を切つて、それを多錢ばかりに賣つて、僅かの油と燈心を買つて佛様に御燈明を上げた、その貧女の一燈を釋尊が非常に褒められて居る。今のやうに金持は切突張である、貧乏人は乞食のやうに何でも手を出す。さうして「さあ呉れ、何故よこさんか」「ナニ賣、やるもんか」と云ふやうな事になつたら、世の中は納まるものではない。餘る者は無論施すのは當然であるが、足らざる者も尙ほ且つ僅かな物と雖も施しをしやうと云ふ精神に導くのが佛教である。それは人は互ひに恩を受けて居るが故に、施すとは云ふけれども、一方から言へば恩に報いる譯である。社會の恩といふものを人は皆な受けて居る、金持が金持に成つたのは、労働者なら労働者が働いて呉れた事に依つて儲けたに違ひない。又地所なら地所の地代が豊貴つたといふのは、大勢田舎から押寄せて来て人が多くなつたから、十圓の地所が五十圓にもなるのであるから、やはり其處等をウロ／＼して居る人間のお影である。人が以前通りすつかり田舎に引上げてしまつたら、五十圓の地所が三圓に下つてしまふぢやないか。それが分らないで唯だ自分一人で儲けたやうに思つて居るから、世の中が皆行くかないのである。如何なる者でも皆な恩といふものがある、大勢の人間がワイ／＼言つて集つて来るから、東京の町の地代

が驕り、家賃が騰つて居るのである。その社會の爲めに大勢の爲めに盡すといふ觀念を持たぬ者は眞人間ではない、今日左様な事の分らん、唯だ我意ばかり突つ張つて居るやうな者は、全く一人前の人間ではない。左様な者は豚糞に放り込んで宜しい者である、これは金持ばかりに限らん、今の人は金持ばかりを呪ふけれども、貧乏人でも唯だ自分が金を貰ふ事ばかり考へて、人の爲めに盡す事を知らんやうな者は、やはり金を拵へて打込んで宜しいのであるから、どうしても總ての人間の精神が柔らいで、世の中の爲めにするといふ考へが相互に働いて來なければならぬ。それは恩の觀念から設けざらざるのである、西洋の文明には恩の觀念がない、權利を主張するといふやうな事を原則にして社會を造らうとした、東洋は恩の觀念を本にして社會を造つて居る、これは明かに東洋文明が勝利を占めるものである。人間が暗愚であるならば幸知らず、人間が賢くなれば、權利の主張に依つて社會を造れば、必ず争ひに終り、破壊に終るのである。恩の觀念から社會を造れば、美風飄蕩眞に喜ばしき人生を送ることになるといふ事を、日本が世界に教へてやらなければならぬ。他の國のウイルソンがどうちやとか、ゴンバースがどうちやとか、そんな事はばかり言はないで、「此方には新様な善い

ものがあるが、一つお試みにやつて御覽になつたらどうちや、唯だそちらでドタバタなさつて居つても皆く行かんやうに思ふが……」といふやうに、日本に於て盛んにこの恩の觀念を養成して、資本家も恩の觀念に依つて社會に竭し、労働者も恩の觀念に依つて盡すといふ模範的の文明を日本に造つて「斯う爲さつたらどうちや」といふ事を世界に教へなければならぬ。それから第四に慧といふのは智慧でありますけれども、この智慧といふことは今日の冷やかな科學の智識を云ふのではない、大切な道徳上の判識を智慧といふのである。それは物の重い輕いを見分けて、本末を知つて行くのである。即ち自分の利益も保全せなければならぬけれども、親の恩といふ事は更に大事である、今日仕事に行けば一圓儲かると思つても、親が病氣で將に死なんとするのを見捨て、仕事に出かける譯には行かない。自分は車轆きで、今停車場まで仕事が來た、一寸ひと走り行つて來れば一圓になる、歸つて一杯飲めば旨いけれども、永らく御恩になつた親が死にかけて居るから、どうも車を賣いて出かける譯に行かんと云ふ位の事が分らんやうになつては駄目だといふやうに、自己の利益といふものは捨て、親に報いるといふ事を判断するのが智慧である。又自分の權利々々といふやうな事を國民が云ふけれ

ども、國家の興廢存亡といふものは、自己の權利以上に重いものである。國が潰れてしまつては權利も何も無い。船の中で「俺が此處に座るから貴様そつちに寄れ」と云ふやうな事を言つて幾ら喧嘩をして居つても、船が破損してしまつたらば、皆な一緒にブクムといつてしまふぢやないか。自己の權利をワイ／＼主張して、日本なら日本の世界的位置がどうなつて行き居るかといふ事が分らんやうでは駄目である、一步を譲れば日本船といふ船が底に穴が明くか、或は暴風の爲めに引繰りかへされはせぬかといふ時に、坐る場所が彼方だ此方だといふやうな事を喧ましく言うて居るべき場合ではない、共に船の安全の爲めに協力一致して懸らなければならぬ。今は平和のやうであるけれども、實際は世界の大大勢といふものは、容易ならぬ状態である。支那と日本の關係に就ても、盛んに「ポイコウト」をやつて居る、西比利亞に就ても、過激派は段々東に勢力を張つて來る。さうして亞米利加は兵隊を引上げて歸り居る、亞米利加と日本の關係に就ても、どうも亞米利加が親切なやうにも思はれぬし、色々考へて來ると、今日日本人が話らぬ事をワイ／＼言つて居る時ではない、自ら警戒して、國民一致して、外侮りを察いで日本の國の地歩を固めなければならぬ。さういふ事の大きい小さいが分か

るやうにせよといふものが、釋迦如來の教へた智慧といふ事である。學問と云つても唯だ白魚の研究に十年かゝつたとか、下らぬ事をコツ／＼やつても駄目である。「大學が獨立だ」とか「學問が神聖ちや」とか言つても、今頃國家の風教を害するやうな事を、帝國大學の先生が言うといふことはない、自分は自由であるか知らんけれども、國家の風教といふものは更に重い。丁度私が斯うして話を居る所に來て、自分が自由であるからと言つて、此處で浪花節か何か始めて、大きな聲で怒鳴るといふことになつたならば、大勢の人がこの講話を聞いて居る邪魔になる。さういふ事をやりたければ、雪隠へでも這入つてやつたら宜しい。であるからさういふ外國の本を讀んで、自分の考へた事を書いて、本箱の中に入れて置くのは宜いけれども、それを雜誌にして世の中に出すといふことになると、演説會に來て阿呆陀羅經をやつたり、浪花節をやつたりすると同じであるから「コラ、喧ましい」と云ふことになる。其處に獨立も、へちまも無いぢやないか、左様な事の分らんやうな者は、決して大學教授たるべき資格の無い者である。左様な事を又學生が騒ぐといふことも、洵に顧問なことである。大學の學問の神聖といふやうなことは、本當はやはり國民の方から言ふべき事である、そんな事をや

つて「神聖々々」と自ら仰しやつても、吾々國民は決して學問の神聖といふことは信ぜられない、もう少しく自ら任じて、一國の文教の發達に貢獻するやうに努力されなければならぬと思ふ。大學は今日日本の文明の上に、非常に責任の重いものであるから、決してバタ／＼することは、自ら反省されたら宜からうと思ふ。左様な事が分らぬのが智慧が足らぬと云ふことになるのである。

斯の如くお釋迦様は説かれて、さういふ工合に物の善惡本末を見分けて行けば、死んだ先きも幸福である、その本末が分らんやうなものでは、幾ら鐘をカン／＼叩いても、口に何と言つても、死んだ先きは畜生が地獄に行くことになる。斯く云ふ工合に信仰と道德と施しと智慧といふ事に就て、それが未來の力になるといふことを釋迦如來は仰しやつたのである。唯だ「ナンマイダー」と日に六萬遍言つて往生が出来るといふやうな事は、佛教信仰の枝葉の問題である。そんな事は朝から晩まで繰しんば死ぬ迄言つても行けるものではない。何と言つてもそんな事は方便の末である、却つてこの阿含經に説いてある方が本當の事である。法華の信者でもやはりその通りで、唯だ大きな聲で唱へたら宜しいと考へるやうなことは駄目である。お題目は有難いけれども、それはさう

節句の時も南無妙法蓮華經たるべし」とか、或は「法華を讀る者は世法を得べきか、或は「世間のほかに佛法あるにあらず」とか言はれて、世間と佛法といふものを融合せしめて居る。然らばそれだけで今の現在生活のやうに、永遠の生命を言はぬかと云ふと、さうではない開目鈔の終りにも「流罪は今世の小苦なれば嘆はしからず、未來に大業を得べければ、大いに喜ばし」と言はれて居るし、龍の口の時も「くさき首を法華經に捧げて金色の如來となるは、砂を黄金に替ゆるが如し」といふやうに、未來に佛に成るといふ事を非常に喜んで居られる。これは言ふ迄もないことで、如何に法華が現在に盡すからと言つて、永遠の成佛を忘れて「生きながら佛や」とか「娑婆即寂光」とか言つても駄目である、こんなものは皆な桁外れである。死んだ先きの事はかり言つて現在を忘れてしまふとか、この世の中が「娑婆即寂光」だとか「阿佛房さながら佛ちや」といふやうなものは、皆な無學のチャンチャラである、それでは阿含經にも及ばなくなつてしまふ。日蓮聖人の一代を通じて御遺文を見たならば、現在の生活も未來の永遠の向上も、共に力を盡された事は論の無い事である。左様にして二世一貫の信仰が佛教の正統教義であるといふことは、頗る明かな次第であります。

いふ心持を原則として、佛教徒は斯ういふやうな事をちやんと知つて、之れを纏めて南無妙法蓮華經と唱へる以上は、世間の生活に就ても斯の如き事を誤らぬやうに、未來の爲めにも斯ういふ事を間違はぬやうにといふ決心覚悟が、一つの南無妙法蓮華經で變遷せられ、指導されて行かなければならぬ。唱へる以上は空ツボになつて、何も彼も忘れて唯だ口だけお題目を唱へて、心は居眠をして行かうといふのでは駄目である。左様な事ならばこの佛教といふものは、世の中を裨益しない價値なきものであるから、その點を佛教信仰の大統として大いに發揮しなければならぬ。

然らば日蓮聖人はどうかと云ふと、これは申す迄もなく安國論をお作りになつても、御承知の通り、先づ生前を安んじて更に後後を扶けむ。

と洵に立派に言はれて居る。現法安、後世安といふことは、安國論のこの一文を見ても分かる譯である。さういふ精神に依つて働かれたから、日蓮聖人は益々鮮やかに、立正安國論の如くに國家の興廢存亡に就ても非常に力を盡し、又現在生活の上に於ても尤を現はさうとしたから、或は「女房と酒うち飲んで南無妙法蓮華經」と唱へる所に法華經の信仰の光があるとか、或は「宮づかへを以て法華經と思し召せ」とか「五

○神月のはちす婦人會 神戶市の日蓮主義者を中心として組織せられたるはちす婦人會は、大正九年七月十一日を以て嵐々の聲を擧げたり。十数日の早鐘にて當日は炎熱燭くが如き日なりしにも關はらず、熱心なる求道の會員は續々集ひて開會を待てり。午後二時開會。幹事の開會の辭に次ぎ、

日蓮上人と親愛上人 西宮祝禱署長 三崎 衛 氏
婦人修養の必要なる所以 熊井本 光 師
の講演あり。何れも熱辯を振つて論説せられ、聴衆に多大の感動を興へ、午後五時一同長巻なる印象を刻して散會したり。

○豐橋立正會 七月十七日午後七時より例會開催「宗教の本質より觀たる法華經」なる題下に松本師の講演あり當日委會者吉橋少將始め知名の士十四名なりしと

○見付教報 七月十九日午後七時より同町青年會主催の下に玄妙寺に於て尼津庵羅者追悼大法要を營み山本導師の追悼の辭に次ぎ佐藤青年會長、報知新聞記者藤の弔辭あり右終て高田副會長の開會の辭に次ぎ報知新聞記者特派員の實見講話及殘壽地の實寫幻燈あり當日は矢野部長始め各官公吏其他參聽千有餘立錫の餘地無く空しく歸る事約半數近來の大盛況なりしと



判 抄

政治と教化

本 多 日 生

而ルニ日蓮此事ヲ疑ヒシニヘニ幼少ノ頃ヨリ隨分ニ顯密二道並ニ諸宗ノ一切ノ經ヲ、或ハ人ニナライ或ハ我ト聞キ見シ、勸ヘ見テ候ヘバ故ノ候ケルゾ、我方面ヲ見ル事ハ明鏡ニヨルベシ、國土ノ盛衰ヲ計ルコトハ佛鏡ニハスグベカラズ、仁王經、金光明經、最勝王經、守護經、涅槃經、法華經等ノ諸大乘經ヲ開キ見奉リ候ニ、佛法ニ付キテ國モ盛ヘ人ノ壽モ長ク、又佛法ニ付テ國モホロビ人ノ壽モ短カカルベシトミヘテ候。譬ヘバ水ハ能ク船ヲタスケ水ハ能ク船ヲヤブル、五穀ハ人ヲヤシナヒ人ヲ損ズ、小波小風ハ大船ヲ損ズル事カタシ、大波大風ニハ小船ハヤブレヤスシ、王法ノ曲ルハ小波小風ノゴトシ大國ト大人ヲバ失ヒガタシ、佛法ノ失アルハ大波大風ノ小船ヲヤブルガ如シ、國ノ

ヤブル事疑ヒナシ、佛記ニ云ク我滅スルノ後末代ニハ惡法惡人ノ國ヲホロボシ佛法ヲ失ニハ失スベカラズ、譬ヘバ三千世界ノ草木ヲ薪トシテ須彌山ヲヤクニヤケズ、劫火ノ時須彌山ノ根ヨリ大豆計ノ火出デテ須彌山ヲヤクガ如ク、我法モ又此ノゴトシ惡人外道天魔波旬五通等ニハヤブレラズ、佛ノ如ク六通ノ羅漢ノゴトク三衣ヲ皮ノゴトク身ニ汗イ、二鉢ヲ兩眼ニアテタラム持戒ノ僧等ト、大風ノ草木ヲナビカスガゴトクナル高僧等我が正法ヲ失フベシ、其時梵釋日月四天イカリヲナシ、其國ニ大天變大地天等ヲ發シテイサメンニイサメラレスズ、其國ノ内ニ七難ヲヲコシ父母兄弟王臣萬民等互ニ大怨敵トナリ、梟鳥ガ母ヲ食ヒ破鏡ガ父ヲガイスルガゴトク自國ヲヤブレラテ、結句他國ヨリ其國

ヲモメサスベシトミヘテ候。今日蓮一代聖教ノ明鏡ヲモテ日本國ヲ浮ベ見候ニ、此ノ鏡ニ浮ンデ候人人ハ國敵佛敵タル事疑ヒナシ。一代聖教ノ中ニ法華經ハ明鏡ノ中ノ神鏡ナリ、銅鏡等ハ人ノ形ヲ浮バウカブレドモイマダ心ヲパウカズ、法華經ハ人ノ形ヲ浮ブルノミナラス心ヲモ浮ベ給ヘリ、心ヲ浮ブノミナラス先業ヲモ未來ヲモ變ミ給フ事曇リナシ。

(神國王書編造一三五六)

政治と云ふ事は、唯だ法律とか経済とか云ふことではない、無論その政治の上には罪人を處分するとか、或は産業を盛にするとか云ふ事はあるけれども、政治の根本は教化を重んずるといふ事から出發しなければならぬ、今頃漸く氣がついて、政治の中にも民力派養といふことがなくなつてはいけな

經濟の上には榮えて居る、兵力の上には榮えて居る、文物制度に於て一等文明の國と云ふけれども、國民の思想の内部から壞亂を生じて、この間の同盟罷工の如き、一步を誤れば英吉利の國は危いと云ふ譯であつた。亞米利加も今尙ほ不安を免れない譯である。これ皆教化と云ふものを輕んじて、人民を利己的に導くからである。「デモクラシー」などと言つて、自己の利益、權利を根本に置いてやつて行くから、遂に利己心の旺盛なる爲めに、國家の團結を危うすると云ふやうになるのである。亞米利加の「ストライキ」は初め富豪と喧嘩する積りであつたけれども、政府が間に遣入つて遂に國家と闘はなければならぬことになつたから止めると言つて居るけれども、それは實は國家と闘ふから止めたのか、國家の活動が敏活であつて、兵隊を繰出し、勞働者に配付する所の積立金は、政府が押へてしまひ、組合の首領は取つ捕へて檢束してしまふと云ふやうに敏速に、今迄の自由國と云ふものが最も猛烈に武斷的態度を取つたが爲めに、彼等は己むを得ず屏息したのかも分らない。今迄は無闇に自由と云ふ事を云ふのが先進國だと言つたけれども、今日亞米利加は一番專横

的な、最も猛烈なる事をやり出して来た、今頃日本で「労働組合を擁護する」とか「ストライキが合法である」ナンと云ふのは餘程晚い、その「ストライキ」は國家を危うすると云ふことに極つて、「二人以上相約して罷業を爲す者は法律を以て處分す」と云ふやうなことが、今日は最も新しいのである。それを今頃「ストライキ」が合法であるとか、個の生へたことを云つて居る、一番新しい事は電報で来て居る毎日の新聞といふものが一番新しい、それはどう云ふ事かと云へば彼等は利己心の爲めに、一寸すれば國家を危うするものであると云ふ事になつて居る、そのストライキが能く止まつたのは不思議であるが、國家と個ふやうになつて、止まつたか、積立金を押へられたから止まつたかどつちだか、疑問だけれども、兎に角止まつたと云ふやうな危ない所である。何十萬の労働者と云ふ者が、本當に國家を了解してやめたか、積立金の配付が出来なくなつてやめたかと云ふことが疑問にされる位に彼等は暗黒なる團結である、それは教化を怠るからさうなる、唯だ工業を發達せしめ、法律の事ばかり喧ましく言ふけれども、民心を善導する所の教化と云ふものを輕んじた

人の面を照すものは鏡で持へた鏡であるが、國家の盛衰を照す鏡は佛鏡である。今の人はさう云ふ事は分かるまい、今でも矢張國家の盛衰と云ふものは、西洋で種を仕込んで來なければならんやうに思つて居るが、西洋の國家の盛衰と云ふものは佛鏡に照して見れば直ぐ分かる。それはどう云ふ譯であるかと云へば、西洋の文明と云ふものは、所謂物質主義の文明であり、權利利益本位の文明であるが故に、これは鼻を突いてしまつた。自己の權利、利益を第一に置いて組立てて行くと云ふことは、壓制政治などに對抗するには工合がよいけれども、その權利利益を本位としたる文明は、人々の間に衝突が起つて來て、争ひの世の中となり、利害の關係が横切つて居る所の労働者と資本家の間には、それが開ひとなつて現はれて來る、又國と國との間に交易して行く所謂國際經濟の上に於ては、それが侵略の形に成つて現はれて來るのである、世界をして不安ならしめて居るものは、國內に於ける労働問題、國際に於ける侵略主義が、今日人類の災禍である、それは何から起るか云ふと、即ち今日の西洋の文明の最も長所として居る所の、物質本位の權利利益の文明である。實

る時には、如何なる進歩したる國家でも、その民心の内部より頽廢してしまふものである。それを七百年前、眞に徹底的に論じたる者が日蓮聖人である、所が今迄はその必要がよく分らなかつた、日本のやうな國は海に覆かな國で波風が無いものであるから武斷的政治をやつて居らうが、教化を輕んじて居らうが、その結果が現はれて來なかつたけれども、今日の如く思想の動搖を來たし經濟問題が勃興して來たと云ふことになる、それは大急ぎで民心の陶冶と云ふことに全力を注がなかつたならば、遂に國家もやられてしまふものである。

故に日蓮聖人が論じて言ふには、自分はこの事を疑つて、色々の宗旨の事を習つたり、自分も見たり、考へたりしたが、自分の顔は自分では見えないから、自分の顔を見やうと思ふ時には、鏡を見なければならぬ。それと同じ事で、國家の盛衰を照すのは佛鏡の鏡に依らなければならぬと言はれた。これは實に立派な言葉であります。

我が面を見る事は佛鏡によるべし、國土の盛衰を計ることは佛鏡には過ぐべからず。

「デモクラシー」ナンと云つて見た所で、個人の權利を主張して居るものであつて、何も新しい事はない、古ひ議論もあり、西洋のズツと長い間やつて來た議論である。であるから權利、利益を以て出發點として、自己の權利、利益を主張して、社會全體の調和的進歩、國家の團結を通じての文明の建設といふことを考へない。唯だ自分に依つて行くと云ふやうなことを考へるから、社會の調節したる進歩といふものは見られない。労働問題など、云ふものは、社會の調和的進歩を阻害して居る事は最も明白である。彼等は何を主張して居るのであるか、「この反抗衝突の中に世は進歩する」と云ふやうなことを言ふのであるけれども、それは丁度夫婦喧嘩すれば、商賣が繁昌すると云ふやうな話で、そんな事はあるべきものでない。喧嘩をして居れば物が進歩すると云ふのは、「ブルドック」か狼の社會ならば、喧嘩に依つて進歩するだらうけれども、人間の世界を以て戰ひに依つて進歩すると云ふことは、有り得べからざることである。

であるからどうしても西洋の權利、利益の基礎に立てる文明と云ふものはいけないと云ふことが分かるのである。佛教

は其を教へて居る。釋迦牟尼が涅槃する時にも言つて居る、「利害相容れざるものが、道德の觀念に依り宗教の信仰に依つて、自己の利害の衝突を緩和して、互ひに譲歩し互ひに融和して行くやうな美風を作つて、狼と蛇と鼻を一つの穴に棲んで相親しむこと兄弟の如くなれば、我れ安んじて涅槃に入らん、利害の違ふものが喰ひ合ひをする」と云ふ世界である限りには釋迦牟尼は安んじて涅槃することが出来ないと言つて居る、今の西洋の文明は利害の異なる所者が相殘害して居る文明で、これは動物の世界である。労働問題などを氣が利いたやうに言つて居ることは、實に愚な事である。又脅かさなければ、資本家が労働者に相當な幸福を與へない、國家も亦之れを彼等自身の働きに任せて置く」と云ふのは、實に愚な組織である、今の労働運動を激進して居る所の社會組織が、大いに改造すべきものである。社會改造の被害者である。國家は何の爲めに存立して居るのであるが、資本家が横暴を極めたからと云つて、それを労働者の暴力に依つて膺懲するといふことを、國家が知らん顔をして、指をくはへて見て居る位ならば、國家は何の爲めに存して居るか、丁度昔で言へば

辯討は本人にやらせろと云ふやうなものである。仲の悪い奴が来て、自分のお父さんを暗殺して行つた、その人間は何の某と云ふことが分つて居るけれども、併しながら役人は決してそれを處分しない。子供は今七歳である、「まあ大きくなつたら辯討にでもやるやうに撃つても教へろ」と云ふやうな譯で、その子供が二十歳になるけれども、逆も一人では辯討できない、伯父さんが助太刀をして呉れば宜いと思ふけれども、生憎伯父さんがない、それぢや、妹が大きくなるのを待てと言つて、妹が又二十歳位になつて、二人で日本中を探ね廻つて、譯は何處に行つたと言つて、何年もグルグル回つて居る。それから愈々鈴ヶ森で目指す譯に出合つた。「イチ尋常に勝負致せ」と云ふやうな譯で、辯討をやる、さう云ふ組織と同じものである。國家といふものがある以上は、その子供が小さければ尙更ら進んでその犯罪者を捕へて、相當の處罰をしてやらなければならん、資本家が惡かつたならば、労働者の罷行などを待たずして、國家が資本家を膺懲すると云ふ態度に出でなければならぬ。隨つて労働者が跋扈すると云ふ場合には、資本家の困難を察して、國家が彼等

の態度は横暴であると言つて、如何なる多數の労働團結と雖も、國家の力を以て之れを制裁するのが當り前である、その當然の事が今日漸く分つて來た。英吉利に於ては、政治も人民も新聞も一緒になつて「ストライキ」はいかんと言つて義勇軍を募つて、自動車であらうが電車があらうが、労働者を斥けて、會社員が機關を動かすとか、學者が馬の尻を打つとかして、労働者を除けてやらうと云ふことまで覺悟して、初めてこの「ストライキ」を膺懲することが出來た。亞米利加は法律の力を以て二人以上相約して業務を休む者は處分する」と言つて彼等が積んで居る金は配付させぬと言つて押へてしまつた。さう云ふ事もやつて國家が漸く少しばかり活動をした。そんな事は何も今更のことではない、國家が存立して居る以上は、最初から斯の如き労働問題などは、今日のやうな状態にならぬやうに注意するのが當然の事である。

ヤ〜の英吉利、亞米利加の昨今の進歩せる方法に依れば、國家が労働問題には一番に活動をしなければならぬことになるのである。國家で適當に活動するならば、「ストライキ」などと云ふ事は不必要な事である、寧ろ罪惡である、「ストライキは罪惡なり」と云ふ事を論結しなければならぬことになつて來る。

我が日本政府は、その自覺があると思ふ。それが爲めに色々の畫策もせられて居るやうであります、却つて國民の中には、國家の力を以て左様な事をするのを非文明であると言つて居る。それは古い頭の奴が多いからである、最も新しいハ

その意味は即ち佛敎に照せばよく分かる、佛敎に於ては左様な西洋でやるやうな物質本位の權利、利益本位の文明を作れば、必ず失敗すると云ふことが書いてある、それは「守護經」の中に佛が明白に言うて居る。

斷常の二見を以て國政を執らば、國家は治まることあるべからず。

と云ふことがある。その斷常の二見と云ふのが即ちそれである、斷見と云ふのは唯物論である、これは人間死んでも魂も何も無い、神も無い、佛も無い、唯だ空々たる世界のみである、と云ふのを斷見の外道と云ふ、それから常見と云ふのは、善い事をして悪い事をして、それは何でもない、やはり極つたものは極つて居るのであると云ふ風に考へて、所謂道

四五

徳の價値を認めないものが常見である。宗教の信仰を輕んずるものが斷見である、即ち宗教を斥け、道徳を斥けて唯利益の目標に依つてのみやつて行かうと云ふのが、「斷常二見に依つて國政を執る」と云ふことである。今日西洋の文明は道徳も無ければ宗教も無いのである、實は唯だ利益の問題である、パンのみ争うて居る文明である。それであるから今日のやうな失敗を見たのである。日本の今の騒がしいのも皆なそれである。段々人氣が荒くなつて來ると云ふのは、道徳の價値を認めず、宗教の信仰の價値を認めないから起つて來るので、その事は佛敎の鏡に照せば明かになる。

従つて日本に於ても、教化を輕んじて正法を蔑ろにしたが爲めに、如何に形式的の祈りをしても價値がない。その事は仁王經、金光明經、最勝王經、守護經、大集經、涅槃經、法華經等の經典に照して見るならば、如何にも明白なことであるといふ聖人は言うて居るのである。

これは非常に大事なこと、政治の根本である所の道徳、宗教の根本である所の信仰を一つ變ると云ふと、大變なことが起るのである、政治ちやとか經濟ちやとか、何とか言つても、居るのであるから國家の前途が危いやうな有様になつて居るのである。

さうして釋迦如來が言うて居るのに、佛法は決して外から破ることは出来ない、恰も須彌山と云ふ大きな山は、外から之れを燒くことは出来ないけれども、世界の破滅の時に至つて、山の中から火が出て遂に須彌山を破壊し終る、その通り佛法は決して外部から破られるものではないけれども、佛敎徒自身が佛敎の正義を習ひ損つて、それが爲めにこの偉大なる宗教が勢力を失墜してしまふことになるのである。今日でもやはりさう云ふ譯で、佛敎が實際に復活して來るのは、佛敎徒の自覺に待たなければならぬ譯であります。

それで法がすたれた時には、國に色々の災禍が起るといふ事を考へなければならぬが、それは第一に道徳といひ、宗教と云ふものが衰へて來ると、人心が乖離して來て、父母兄弟王臣萬民等の間に、互ひに敵同士の心が起つて來る、即ち父母兄弟と云ふやうな肉身の親しみと云ふ道徳が壞はれ、君臣の關係に於て其の情誼が壞はれる。人民が皇室を思ふの精神が薄らいで來て、甚しきに至つては、梟鳥が母を食ひ、破

道徳と云ふこと、宗教と云ふことと離れたり、世の中は何にもならぬものである。此處に譬を擧げて日蓮聖人が言はれるには、水は能く船をたすけ、水は能く船を破る。五穀は人を養ひ人を損す。

人は飯を食つて生きて居るが食ひ過ぎれば、胃病になる。小さな風は大きな船を損することは無いけれども、大きな風が吹けば小さな船などは木片微塵になる。政治の變りも小さな風の如きものである。何が大きな風かと云へば、道徳を無視し、宗教を無視するに至つて、これは大風が吹いて來たやうなものである。政治の上にて僅かな政策を變つたとか、今の憲政會、政友會が争つて居るやうな問題は、小さな波、小さな風の争ひである、大きな波、大きな風の争ひは、一國の文教に於て道徳の權威を失墜して居るとか、宗教の信仰が無視されて居るとか云ふ問題が根本である。所が悲しい故、我國に於ては、大きな風が吹き大波が寄せて居るやうな風に、道徳の根本に於ては、我國の國體と云ふものを輕んずるに至り、宗教の方に於ては、法華經の様な尊い敎を輕んじて、方便の敎に流れて居るから、大風起つて船を破るが如くに爲つ

鏡と云ふ事が父を害するが如くに、國民の中から賣國奴が現はれて國家を破る事になる、日本の國は決して他の國から侵略はされないけれども、國民の中に國體を重んずる觀念が失はれ、小さな利益の爲めに他國から僅かな金を貰うたりして、危險思想の傳播を計つたり、下らない運動をやつて民心を乖離せしむる事に依つて、遂にその國を破られるのである。民心が動搖して而して後に他國よりその國が攻められる、その事は日蓮聖人が痛切に言はれて居る。

父母兄弟、王臣萬民等互ひに大怨敵となり、梟鳥が母を食ひ、破鏡が父を害するが如く自國を破らせて、結局他國より其國を攻めさす可しと見えて候。今日蓮一代聖敎の明鏡をもつて日本國を浮べ見候に、此の鏡に浮んで候人々は、國敵佛敎たる事疑ひなし。

今佛敎徒の態度は、實に日本の國家を危うするやり方である。又法華經の敎を失ふやり方であるから、國敵佛敎であるといふ事を日蓮は切言するのである。これは實に宜い所で、日蓮主義は宗教の議論の中に、常に一方から言へば敎を立て、國を安んずることを理想して居るので、これに反對する者

は國の敵である、教の敵であると云ふことを論ずるのである。一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡なり、銅鏡等は人の形をば浮ぶれども、未だ心をば浮べず。法華經は人の形を浮ぶるのみならず、心をも浮べ給へり。心を浮ぶるのみならず、先業をも未來をも鑿み給ふ事盡り無し。前の世のことも後の世の事も、總てを照すものが法華經であると云つて、如何にも「天晴れぬれば地明かなり、法華を讀る者は世法を得べきか」と云ふ精神を、此處に高潮されて居るのであります。

◎明石市の尼港殉難者追悼講演會 七月十二日午後四時より明石市公會堂に於て尼港殉難者追悼大講演會を催し講師として大日本救世團長大迫大將を招聘す來聽者壹千五百名の多數にして多大の感動を與へたり

- 開會の辭 三輪明石市長
- 誦て英靈と語る 救世團理事 本田仙太郎氏
- 尼港事件と思想問題 陸軍少將 野澤傳吾閣下
- 尼港問題に就て 陸軍大將 大迫尙道閣下

◎播磨聯合布教大會 本宗播磨聯合布教は明石市公會堂に於て左の大

講演會を開催したり

開會の辭 坂部播磨會幹事
國家の現在及將來 吉永日洋
聖德會見 中川文學士
犧牲的精神 原田布教師
尼港事件は何を教ゆるか 能仁僧正
△第十五救世團同布教 六月十七日午後八時より鳥取法泉寺に於て開
催盛況

- 開會の辭 中島孝治
- 日蓮聖人の信仰 原田日男
- 十八日午後一時より鳥取縣會吉聯合布教團主催公會堂に於て、會員の靈力多大なりし
- 開會の辭 富田日進
- 日本の國民性 中島孝治
- 日蓮主義の特長 原田日男
- 十九日午後八時より松崎本立寺に於て
- 開會の辭 富田日進
- 我信仰 中島孝治
- 不滅觀と現代思想 原田日男
- 二十日午後八時より姫路御靈社に於て
- 日蓮主義と普遍 矢部事正
- 守護國王 原田日男



教義

日蓮聖人教義綱要 (第三十七)

井村日威

第九章 得 益

第一節 感應の意義

吾人の行願は上に菩提を求め、下に衆生を教化すべく大志願を發すにあることは前章に於て詳細に申上た處であるが吾人の信仰は如何なる場合に於ても此大目的を達してはならない、我等が此大目的を達せんが爲めに發する信念力は佛陀世尊の納受し給ふ處となつて、茲に本佛大慈の本願力と本法妙法蓮華經の本濟力とに結びついて、其處に大利益を示現するの結果を顯して來るのである、此を得益と云ふ、我等が信仰の目的は此得益を確實に獲得せんと欲するに外ならないのである、本章には得益に就いてお察するのであるが、最初に

感應の意義に就いてお察をする、感應の意義が分明して居ないと得益の有無に就ての直實の理解が得られないと思ふが故である、感應と云ふことに就いては、天台大師が玄義の中に委しく御説明に相成つて居ることであり、感とは我等衆生の方に就いて云ふのである、此に三義ある、一には微の義で、我等衆生に微し發かんとするの義がある處である、終に發動せんとして少し心の動きかけた場合を云ふたのである、第二は關の義、佛の慈悲に連れられて微善相生する状態を言ふたのである、第三は宜の義、宜しき處に隨つて我等の心が動き出すを云ふのである、斯る有様で、我等の心が動いて來るとき佛陀は此に對して適宜の教化を垂れらるゝ、此を應と云ふ、此にも矢張三義ある、第一は赴の義、此は衆生の善根

將に發せんとして微かに動搖を生じた時に佛陀は直に此に赴きて其微發の善をして力を發せしむるのである、第二は對の義である、前の關の義に對するので、衆生微善あるが故に佛陀の應化と爲り、佛陀の應化あるが故に衆生の善生することを得、衆生佛陀相對して互に化益を生ずるを云ふのである、第三は應の義、機の宜きに應じて拔苦與樂せしむるのである、三義ありと雖ども、佛陀の慈悲常恒不斷に我等衆生に蒙むるを言ふたのである、壽量品に

我常に衆生の道を行し、道を行せざるを知つて度すべき處に隨つて爲に種々の法を説く、毎に自ら此念を爲す、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめん

と説くは感應の意義を御説に相成つたのである、佛は常に我等の行道不行道の有様を御覽に相成つて居つて、其に適當した御利益を御與へ下さるゝ其事には些少の錯誤も無い、我等の一舉手一投足と雖ども徒勞に對するものは一も無いのである、然るに世間には往々佛陀の御力を疑ふて居るものがある、私はコレを信心するの御利益が無い、何う云ふもので

て佛を誣するに佛直に應赴し給ふが如き是である、我々の淺薄なる信仰も時に意外の利益を蒙むることあるは此種に屬すべきである、第四は顯機冥應である、顯機は前に同じであるが、時に何等の應酬なきことがある、世人の生涯慈善に盡して而も尙貧しく、現善濃積すとも尙盛しく遂に應現あること無きか如きである、而も應現現前せずと雖ども密に益する處あるを顯機妙應と云ふ、顯冥共に聖慮に依る、敢て凡智の及ぶ處にあらざるなりである、感應に此四種あるを知らば展義自ら水釋するのである、故に天台の云く

若四意あるを解らば一切の低頭擧手の福盛しく業せず、終日感無けれども終日悔ゆること無し、設ひ殺を喜ぶもの長壽に、施を好むもの貧乏なるを見るときも邪見を生ぜず、若此を解せざれば其功を徒にし、計を衰ふと謂ふて憂悔して理を失はん

と、現今の信者と稱するもの、此意を解せず其功を徒にし、計を衰ふの愚に陥れもの甚が多きを覺ゆるのである、若其感應の意義を能く解せば終日無感終日無悔、聖慮に打任せ任運に其時の至るを傳つべきである、感應の關係は更に細

あらう、佛機がお在にならぬのであらう杯と云ふて居る人もある、此に就いて天台大師は感應の四句分別と云ふことをお説きになつて、そんな疑問の起らぬ様に説明せられ居る、感應の四句とは、第一に冥機冥應、此は機應共に表に顯はれて居ないのである、冥機とは過去に於て信仰の善根を積んで居つたが、現在世に於ては、未だ信仰の實際を表はさないから、表から見れば無信仰の者である、今は無信仰者なれども宿善あるが故に冥機と云ふ、衆生の機應既に冥伏せるが故に聖慮亦隨つて顯かならず、現在に何等の靈應なしと雖も密に利益する處あるを冥應と云ふ、感應共に聖のみ知し召す處にして凡夫の知らざる處である、第二冥機顯應、冥機は前に同じ、顯應とは機應現に顯はれざるも宿善成就するが故に、現在世に於て佛に値ひ法を聞くことを得て、現前に大利益を獲得する、是を顯益と云ふのである、佛在世の得道の人の如き、宿善の發する處佛化に値遇して益を獲る即ち是なり、第三に顯機顯應、現在に於て身口意三業に精勤して懈らず、能く佛陀の慈教を信じて不惜身命の心地に住するものは是を顯機と云ふ、佛陀の靈應忽ち顯はるゝを顯應と云ふ、須達長者長説し

別せば支義には六萬四千八百の機應ありと言へり、聖慮何ぞ思議することを得んである、更に感應に就て吳々も注意すべきは本尊の撰擇を誤てはならぬことである、此は前章第三節行者安心の下に委しく申上であるが、此機會に於て再び注意致して置かうと思ふのである、感應の源泉は佛陀の慈悲にあることを忘れては、如何に信仰に志さずとも、水源無くしては水は湧き出るものではないと云ふことは銘記して置かねばならぬ。

日蓮主義倚人傳

一、石本久雄氏

越前福井市の人だ、名は男の標だが實は妙齡の美人である。敦かな運命に弄ばれて下手な稼業に數年を暮して居たが、さる人に思はれて今は何不自由なき生活をして居る。深く法華經を信じ、現代日蓮主義の高僧達を慕ふて、遂には一身を佛門に捧げんと念願し、暫し野口信正の許に暫寓して居たが、信正の訓誡を聞いて頓悟する所あり、有髮の優姿爽として、情淨なる獨身生活に入り、念佛門徒の異質なる越前地方に在りて、身を以て近隣を化し、以て法華經の宣傳に従はんと誓つて居る、大正の須磨提女との名を野口信正から贈られたそうだ。



録 雜

濠洲に於ける社會政策

海軍中佐 井上清純

八

要するに我濠洲の政策は適用の方面に於ては幾多に岐れて居るが、結局の處國家社會主義の實行であつて金持を作らず貧乏人を掃へぬと云ふのが政策の根本義である而して此の點に於ては歐米諸國にも先手を打つて居る惟ふに歐米の如き舊國は是なりと信じて中々思ふ様に行かぬらしく濠洲の成績を見做ふて始めて實行するのである云々更に氏は言葉を轉して國家社會主義は何も濠洲特有のものではない又其政策に於ても歐米の方が發達して居るものも少からぬのであるが濠洲の社會主義が歐米と異つて言論の社會主義でなくて實行の社會主義であることは先づ注意を要することと思ふ又最も濠洲に於て偉とすへきは其の政策を何處迄も眞劍に徹底的にやる所にある從て當に先手から先手に當て法令の改廢なども實に夥多しい昨日出たものが今日は變る恰も掌を返すとも云ふべきであるが此の如きことは政策實行上に於て

毫も分意しないのである此の眞劍と徹底とは貴國の政治上に於ても十分御成光を顧ひ度然らば何故我國の政策が眞劍徹底に當るかと思ふと其の第一の原因は濠洲が新國と云ふことである或く迄もなく濠洲は一千七百七十年クックが発見し其の後一千七百七十八年に總督のヒリアプが千人計りの人間を伴れて來た所て濠洲の開發は極めて年限か短い幾ら長くても百五十年にしかならない若しも濠洲の金銀の發見を以て新紀念とし之から起算する事ならば七十年にも足りない僅か人間一代の間に過ぎないのである斯の如く新しい國で貴國等の如く貴族富豪の後裔とか階級とか云ふやうなもの一人もない濠洲五百萬の市民は凡て一率平等である從て濠洲には特權階級なく特權階級なく或る國に於て見るが如き徹底的の政治をしやうと思ふても是等の階級に妨げられて目的を達しないなど云ふ事はないのである。

第二に濠洲は英吉利帝國の國籍を脱した者が理想的の新國家を形成

しやうと云ふ人によつて成り立つて居る事である抑も本國を脱して濠洲に移住して參つた者の多くは英國は如何にも程有いと感じて去つた者ではない否英吉利の政治や制度は悪い即ち英本國の舊慣桎梏の下では到底満足を得る事が出来なから此の濠洲の新天地に理想的の國家を建設しやうと思つて居た者が移住した國である否少くとも此種の人によつて濠洲は政治を爲されて居るのである例へば建國の偉人サーヘンリーパークスでもパークスは英國貴族の子で幼時より労働により生活し二十餘歳の時其の妻と共に補助移民となりてシドニーに來ましたか極めて家貧にして或る時は途に六片の銀貨を拾ひてパンを買ひ僅に空腹を凌ぎたる事などあります雖も本國にて習ひ覺へたる象牙細工によりて小店舗を開き終日仕事場に座して玩具及小器物を製作する傍新聞紙を讀みて濠洲の政情に通じ役選ばれて州會議員となり政界に入り自ら新聞紙を刊行して盛に政治を論じ議見の卓拔なるを以て群小政治家中に頭角を顯し遂に内閣を組織して威望隆々であつたのであります今日この濠洲聯邦を組織する事を得たるは主として阿氏の盡瘁によるのであります現總理大臣ヒュースにしろ(ウネリヤムモリスヒュースは一八六四年度英國ウニールに生れ郷里に於ては小学校教員であつた事もあります千八百八十四年濠洲に渡り労働を以て生計を營み或る時は蠟燭傘の繕ひを業とし又仲仕として棧橋に働きました英才は自然に發揮し後労働黨に入りまして政治に奔走し千八百九十四年ニユ

ーサクスクエルス州會議員となり千九百一年に聯邦議會下院に入りました其の間法學を研鑽しバリストルの學位を得千九百三年辯護士の登録を受けたのであります内閣に入つたのは千九百四年アットソン内閣の外務大臣たりしに始まり爾來内閣組織毎に重要な地位を占め自ら數回内閣を組織し今日に及んで居るのであります)又之と手を握つて居る自由黨の領袖クックにしろ共に本國の桎梏から逃れて新天地を掃へて見やう理想の社會を建設しやうと云ふ意氣あり氣ある人が政治を爲して居るのである殊に是等の人に於て責べきは自ら具に辛懐を嘗め飽く迄人情の機微を味ふて居るのであるから智識や學問の上で人世を解するのと違つて人類に對する觀念が強烈となり隨つて政治が勞ひ徹底的ならざるを得ない勢ひ又犠牲的ならざるを得ないことである。

九

更に第三の原因は政治の民衆化と云ふことである一體濠洲には前述の如く特權階級の階級がなく一率平等の人に依て組織せられて居るのであるから政治は初めから民衆化して居るが殊に此の事が鮮明になつたのは労働黨の出現からである一千九百年の始めに濠洲でシーメンスのストライキをやつたことがあつた此ストライキは濠洲全體に亘つたの大ストライキで結局はシーメンスの方が資金の缺乏から負けたのであるから負けると共に直に之を政界に持つて來て所謂労働黨と云ふも

の出現したのである。労働黨の出現は政治を愈が上に民衆化し普通選挙や其の他の事に非常に成功した此の政治の民衆化が眞實政治家を演出するに當つて最も有力なる原因であることは勿論である。極卑近な例であります。私がシドニーに着きました翌日でありましたが外で非常に喧しい聲が聞へるから何かと思つて出て見るとヒューストリーと云ふ名が聞へる。シドニーに来て今やヒューストリーで大道演説をして居るのであります。即ちヒューストリーはヒューストリーと云ふ一才した足場の様なホールの中で戦時公債を買へると云ふ事を極めて熱心に演説をして居りました。日本などでは總理大臣の演説などは中々聞かれぬので殊に大道演説などは到底見ることが出来ない。濠洲とは非常に懸隔がある。のであります。又公債の募集に付ても大蔵大臣が自ら廣告をして居ります。公債は兵士を養ふ爲の公債であるから是非購へよ若し豫定の額に達しないときは已を得ず強制的に訴へなければならぬと云ふことを廣告して居ります。

夫れから尙一つの大きな原因は濠洲の無限の富である。此の富の事に就ては別に御報告しますから略しますが濠洲は日本の十幾倍もある。大なる國であるのに其の人口は僅かに五百萬之れ丈でも豊であると云ふ事は想像が出来ると思ひます。以上掲げた原因の内でも最も大なるものは政治の民衆化、徹底的政治と云ふこと之れが濠洲の今日を爲した大原因であると約三時間に涉り説明せられたのであります。

狀であると云ふ話をさへ聞いた。此の頃は子供が中學へ行くか行ぬ位のときで又年動からしても四十から五十迄の間で言はば人間が熱練して最も役に立つときである。然るに此の時に於て賦首せられ怒らして一家行詰りの悲惨に泣く之を濠洲に於て五十六歳迄新規採用など云ふ公告などあることに考へ及ぶと同情の相違とは云へ痛恨を刻む様な感じがする。而も我邦の富が適宜に分配せられて各人の所得が其の能力に應じて居るのならば宜敷か或る者は暴富に暴富を重ねて或る者は極めても裕いでも追つ付かないと云ふ様な社會の狀態でありとするならばそこに社會の缺陷はありはしないか。元來生活に對する人類の需要品には一定の限度があるもので皆同量には至れるときは味なく肴數種に及ぶときは美なく茶數碗に及ぶときは香ばしからずと云ふた誠其の通りで雀は一日十粒あれば暮しが出来る米俵を散んで何にする。而も雀から車に俵を積む丈で害はないが人間になるとそいつが特に悪い事をする女を買ふ遊蕩に耽る事等は未だしも國民生活を犠牲に供して買ふ賣物をやる又立法機關を欺して議員買収など勝手な眞似をする。誠は沙汰の限りである之をしも健全なる國家組織と見得べきや建國の精神は果して如此ものであらうか。今や世界は改造の秋である。我邦獨り之を免るる事は出来まい。そこで先づ考慮を要する事は我國民の一般が覺醒を爲すの要ある事は勿論であるが政治家が其の本然の立場に隨り政治は即ち犠牲である事を能く解し擔はれざる政治を爲すの必要

茲に於て私は禮を述べて同氏に分れメルボルンのホテルに還りました。願ふに國家社會主義に關することは本の二三冊も讀んだ事がありま。す長所短所共に知つて居りますが彼の戦時中に發表になりましたセイムスハルティンズミスのエコノミックスモーターリズムにも歐羅巴の交戦國は次第に其の産業を廣き範圍に涉りて合同主義の上に組織する事となつた。獨逸の場合が特にそうである。開戦以來獨逸の軍國主義は國民の生活狀態をも政府の手に依りて引續き支配する事となり斯くて獨逸に於ては一個の社會主義的國家が現出されつゝあると書いてあつた。如く最近の立法は著しく國家社會主義に傾いて居ることは否むことが出来ない。孔子様は食足り民をして之を信ぜしむと曰はれて居つた。又ダントンの言にパンの後は教育が最も必要であると述べてあつた。此のパンの後は云ふ一言が實に千鈞の重みを持つて居るのである。又嘗てキビタリズムと云ふ本を讀んだ時に經濟の事は網の元ジメの様なもので人類社會凡ての物は之を基礎として成り立つと書いてあつた。學者や聖人の言を待つ迄もない衣食住は最も卑近の慾望であるが、而も之が人類生存の基礎である事は三つ見てもよく知つて居る。然るに現在は何である。成り金や暴利取締令に關する様な奴は別として健全なる中産階級の階級は衣食住の爲に神經衰弱に陥つて居る否。營養不良に陥つて居る様な我邦の有様ではないか。曾て役人をした時の經驗に依ると列任官などは恩給につくか付かぬ頃が丁度賦首せらるる頃で恩給證書は賦首の免

あると共に政治の民衆化と云ふ事が必要ではあるまいか。從つて普通選挙など云ふ事も或は落ち付く處があらう。又實業院の改良なども追つて出て來らう。尙故テグナーの云ふた様に租税を社會政策の目的に用ゐて今少し徹底的單邊税を課するの必要もありはすまいか。場合に依りては生活必需品に對する價格公定も面白からう。米や砂糖等は從來の收入主義でない意味に於て專賣制度にすることも必要ではあるまいか。地價修正も此時であらう會社の利益分配も適度に制限するか或は國家が其の一部の割當を取つても良からう。彼の特權會社や補助會社などか五割十割の配當を爲すなどは沙汰の限りである。要するに時代は進めり最早古き經濟學や契約自由の原則などに據はれて居る時代は疾くに過ぎ去つた。など夫れから夫れと思は置かれて床上に一夜轉睡間々として過しましたのは私がメルボルンを立つ確か二日計り前の夜であつたのであります。

前に申しました通今日は私の唯感じましたことを粗雑に申し上げましたので勿論間違もありませう。考へへの單調な所もありませう。今後如何なる社會政策を執るかに付て確信もありません。尙時間には迫はれまして肝要の處に説明が十分に出来なかつた所も澤山ありまして私として遺憾であるのみならず嗚や御聽き苦しかつたであらう。事と存じます。此の點は幾重にも御説申上げます。(完)

記事

巡回教化

川島 松雄

一月以來過度の活動にて、病床に臥するの止むなきに至りし高木主任は、其後健康を回復して、再び勇ましく戦場に乗り出し、加ふるに毎回國友部長の出馬するあり、戦闘は愈々闊となりぬ。又社會部は其部を分ちて庶務、宣傳の二部となし、更に宣傳部を分ちて巡回教化と、民衆教化の二班となし此所に初めて秩序整然たる活動を成し得るに至つたのである。

七月は盆の月なれば、我うごくても一層花々しき活動を試み、院よりをかけて、國友部長の出動命令の下に廿一日より戦闘を開始するに至つた。

あ、彼等細民は我うごくてからの巡回を待ち居りし事よ、彼等は恰も、早魃に雲影を望むが如くに、うごくてからの来るを慕を打ち初めたのであつた。越へて廿三、四の兩日共、最後に法要を終るや大雨沛然として下り、爲に天幕も覆れるかと思はれる程であつた。

然し日蓮聖人は仰せられた「魔鏡はすば正法と知るべからず」と此御聖訓を拜察すれば、彼等惡魔こそうごくてらの活動に恐れを成して、有ゆる妨害を試み、我等の進軍を粉砕せんとするものであらう。然し汝等惡魔のどよめきも今暫しだ吾等が右手に握れる法華經の利劍もて、眞二つに打ち割りくれんも間近い事で、兄弟鈔に「第五の巻に云く、行解既に動みぬれば三障四魔紛然として競ひ起る、乃至隨ふべからず畏るべからず、之に隨へば人をして惡道に向はしむ、之を畏るれば正法を修するを妨ぐ云云。此の釋は日蓮が身に當るのみならず門家の明鏡也、謹んで習い傳へて未來の資糧とせよ」と、あゝ有難いかな南無妙法蓮華經。

終りに中村藤吉氏野島連平氏等の偉大なる盡力を同人一同に代りて深謝す。

□七月廿一日品川町南馬場妙蓮寺境内に於て盆施餼鬼水向供養並に講演會、三百五十名、講師高木主任、國友部長、山内櫻溪先生□一廿

渴望して居つたのである。うべなるかな同人が彼等の巢窟に其委を現はすや、小供等は「あゝうごくてらの人よ」とあちらからも、こちらからも集り、行儀をくづして晚酌を傾け居たりし人達も、直ちに姿勢を直し、赤裸で居たりし者は俄かに着物を引つけて「どうも御苦勞様で御座います」と赤心より感謝の辭を述べるのであつた。然して毎回二百以上も水塔婆の供養のありしを見ても、如何にうごくてらの効果が偉大なるかを推せらるゝのである。

唯此所に一つ困るのはうごくてらの天幕を動かすと必ず雨が降る事である。如何に晴天の日と雖も、天幕を動かして未だ一滴も雨を見ずして止みし事は殆んど無いのである。井村總務は「うごくてらは雨降りを原則として居るのだらう」と鐵言を言はれたが、それが鐵言所ではない、眞實其通りであるから恐ろしい。今回も近來雨が降らないで困るから、一ツ天幕を動かそうではないかと、同人は言ふて居つたが、あに計らんや廿一日天幕を張るや否や、今迄一點の雲も無かりし空は、俄かにかき曇り、一陣の風サツト過ぎ行くと思ふや、あな恐ろし、雷はおどろ／＼と鳴り出し雨はつぶての如く天

二日同所、靈小供會、講師川島、野島松雄、夜大人會、三百五十名、講師高木主任、笠川日堂、餘興講談、桃川蝶花君。□一廿三日淺草田中町に於て、盆施餼鬼水向供養並に講演會、三百名、講師高木主任、野口日主師。□一廿四日同所、夕小供會、講師高木主任、川島松雄、夜大人會、三百名、講師高木主任、國友部長、山内櫻溪先生、餘興講談桃川蝶花君。□一廿六日南千住に於て、盆施餼鬼水向供養並に講演會三百名、講師高木主任、國友部長。□一廿七日同所、三百名、講師川島松雄、野口日主師、餘興講談桃川蝶花君。

名古屋の歩兵戰(第二回)

▲思想戰は其趣き軍戰と毫も異なるどころあらず、佛在世に於ても、我鎌倉時代に於ても、先例典型は、幾千幾萬の多き細大各種に互りて吾人後進に示さるゝものあれば、吾人は唯須からく其芳國聖神に準據し以て之を現代式に應用活潑すべく發奮努力するところなかるべからず、論より證據既に過去の第一回歩兵戰に於て、豫期以上の効果法益を收獲したる在名古屋同人は三伏の暑中も物かは、熱時宜しく熱を熱殺すべしとの意氣込を以て、其第二回を開始したり

▲八月六日午後七時より名古屋市外八幡村劇場大正座に講

演會開催、(開會の辭に因みて)清水一乘、(最古最新の道徳)丹羽少將、(國民の自覺)國友日斌、(大乘國民)山内櫻溪の諸豪出陣、聽衆七百餘名、確かに手應へある快感を覺へき、斯くして第二回歩兵戰開始の狼煙は爆々として高く金城下に響き揚れり

▲同七日午後二時より六時まで尾張一宮町歌舞伎座に開催、聽衆八百餘名(開會の辭)清水一乘、(佛敎勤王論)山内櫻溪、(建國之理想)國友日斌、(尼港事件に就て)丹羽少將、舌鋒犀利、條理明晰、破邪顯正の大法益を舉與し得たるは吾人の坐ろに法悦を感ずるところなり、快感之餘韻は覺へず櫻溪仙史の口を衝て出づ、確かに紹介の價值ある國風とや申さんか

『雨音はまだやまなくに薄雲のひまよりも夕月の影』

▲同日歸路午後八時より八百屋妙行寺に開催(開會の辭)清水一乘、(時事所感)國友日斌、(同情之極致)山内櫻溪、▲同八日午後七時より新川町日進教會に開催(開會の辭)清水一乘、(靈性の發揮)國友日斌、(人と生れしからは)山内櫻溪、當夜は屢々驟雨の往來して外出には極めて不適なるにも

開會之辭 石井山主
國民の覺醒を促す 國友日斌

▲八月二日足羽郡社村南居妙正寺に於て尼港追弔會並に故石井前任職の追悼法要を修行し、終つて講演會開催、殖衆無慮五百。

開會之辭 梶木住職
慈愛と信仰 國友日斌

▲八月三日蘆原温泉いろは館樓上に於て講演會開催。修養と信仰 國友日斌

此地は近來般賑を加へし温泉場にして、各地より移住せし信徒十數戸あり、一宵の法廷若し深き佛縁を結ぶの端緒ともなりなば、其の功德蓋し無量ならん。此夜講演果て、聽衆尙散せず、夜更くる迄種々の物語に時刻の移るを惜む、此機會に兎も角も信仰の團體を結束すべき協議を家土産に、深更二時半漸くにして袂を分つ。

▲八月四日金澤市本長寺にて講演會開催、大低氣壓の本州中部を襲ひしは此の夕にして、北陸地方又其餘波を受けて、豪雨盆を覆すが如し。熱誠なる聽衆約八十。

關はらず聽衆堂外に溢れ、諄々たる法話を傾聴し話趣徹底、天爲めに堪き地爲めに堪ぐを見受けたり、紀念を越したる期待の詩湧く

『無風荷葉動、必定魚往來、感應亦如是、舌端奏妙機』

▲同九日午後七時より古渡町靈山寺に於て(開會の辭)清水一乘、(節義と信仰)國友日斌、(自治の根本真諦)山内櫻溪の三氏にて十一時閉會せり、尙ほ引續き開會の座所準備中なるが、總じて此數日間の歩兵戰は、恰も軍戰の奇襲と等しく斥候的準備軍の勞苦、轉輸者の苦艱却て堂々たる大軍砲戰に優るものあり、其れだけ亦法益教效尋常ならざるもの有るを信ず

(十一日稿)(櫻溪記す)

北陸偵察戰

加賀越前地方に教線を擴大すべく予は八月一日を以て單身教況偵察を兼ねし巡教の途に上る。

▲八月一日福井市妙經寺に於て尼港追弔會を勤修し、國友師大導師として縣下の僧衆を率ゐて丁寧に讀經回向し、終つて講演會を開く、參詣者本堂に滿つ。

開會之辭 窪田布教師
懺悔と信仰 國友日斌

金澤市は數代惡しき住職に荒されぬ。昔繁昌を誇りし本宗八ヶの寺院は、時代の推移と惡住職にたゞられて、今は古の面影なく、漸くに殘れる五ヶの寺院は、或は本堂ありて庫裡を缺き、或は鐘樓堂存して梵鐘なし、軒は傾き壁は落ち、法運の衰微せらるに涙とほる。凡て之れ先聖の心血を以て堂塔を築き、骨肉を割いて莊嚴となせしを。殊に此地は常樂院日經上人に深き因縁を有せるを。如何に末世なればとて此くまで寺門の敷額を招きしは惡住職の罪愆みても尙餘りあり。幸に先年惡僧共は凡て其跡を絶ちぬ、今は昔本長寺に剃髮せし窪田僧都の歸り來りて、身命にかけて金澤五ヶ寺の復興を誓ふあり、温厚熱誠ある石橋師の本行寺に在りて窪田師を助くるあり、更に安立寺は粉骨碎身身にかちりついても其の復興に努力すべき大誓願の下に赴任し來らんとする新任職某氏を待つあり。誠意以て盡さば金銀又鎔けん。一度難反せし體信徒は新に希望と喜悅とを以て復り來り、僧俗一結寺門の復興に當らんとす。予は金澤地方本化の宗門振興の未來を夢み

つゝ夜十一時、信徒に送られて豪雨の金澤市街を自動車を驅りて汽車の客となる。

▲八月五日京都市妙満寺に於て講演會開會。

- 開會の辭 村岡本量
- 改造と宗教 吉永日洋
- 國民の自覺 國友日斌

(國友日斌記)

久留米教報

○七月三日午後八時より久留米天晴會例會を本泰寺に開く

- 法華經要義 其三 中原通應
- 國家觀念の培養 法學士 中原龍己

○七月五日午後二時三十分より本泰寺に於て正信會開會

- 現代思潮と佛教 中原通應

○七月六日午後三時より三井郡音野區に於て民力振興の爲め講演會を開きたるが平田利三郎氏は會場を提供し野瀬末吉氏廣告準備に盡力したる爲め全區各戸より一名以上の來會あり盛況を呈したり

- 國民的自覺と佛教の本義 中原通應

○七月七日筑前上浦、川上安平宅にて家庭講話會を開催す

- 佛教信仰の妙味 中原通應

○七月十二日、同信會法話、七月十六日盆施餼鬼會法要並法話修行

- 現代思潮と國民の覺悟 中原通應

○七月十三日午後四時より市内國武玩具工場職工講話を開催

- 法華經要義 其四 中原通應
- 佛教に對する批評 中原法學士

○七月十七日午後八時久留米天晴會例會

- 佛敎に對する批評 本會幹事
- 聖語朗讀 中原幹事
- 日蓮主義の特長 新開清八
- 東洋文明に於ける佛敎の地位 中原龍己法學士
- 佛敎に現はれたる實際問題 中原通應
- 閉會之辭 本會幹事

○七月三十日午後八時久留米天晴會一週年記念講演會を公開したるが聽衆頗る眞面目に傾聴多大の感動を與へたり

- 閉會之辭 以上

廣告

謹告

炎暑の候各位御清榮奉賀候 陳者先般當閣増築營繕資金壹萬圓を勸募致候處續々四方の諸賢より御申込有之既に申込額は九千二百七十六圓に相達し、現金收納約三千圓を計上仕候。目下諸物價も低落致來候故近々着工致度所存に候。就ては同じくは此聖業をして可成廣く多くの御信者と妙縁を結んで大法廣布の堅き血脈たらしめ度存候まゝ金額の多少に由らず進んで御喜捨被成下其御功德に依つて一日も速に法域を莊嚴し自他の佛事を成滿せしめられんことを念願仕候。

大正九年七月十八日

統一閣増築係一同

各位

謹告

時代の要求に鑑み、本會の爲め貢献仕
り度今回統一團名古屋支部分會を
創立し九月十三日を以て名古屋市外
八幡村字五女子大正座に於て總裁本
多日生猥下の親臨を仰いて發會式並
に大講演會を開催仕候條、大方の同志
諸君に於ては、何卒祝辭又は祝電を寄
せて本分會の前迄に聲援を與へられ馬
茲に統一誌上に於て懇願候也
大正九年八月一日
名古屋市中區八幡村字野々林幸太郎方

統一團名古屋支部
南部分會創立事務所

思想の惡化善化
正しき理解と信念
法華經要文

一部金六錢百部
以上五錢の割
送料一部金貳錢
一部金六錢百部
以上五錢の割
送料一部金貳錢
一部定價
並製金參拾錢
上製金五拾錢
送料金一錢

- 大日生師著書一覽
- 法華經心髓 壹圓參拾錢
 - 日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢
 - 聖訓要義 卷一、二、三、四、五既刊、壹圓七拾錢
 - 開日鈔詳解 上卷一部 金貳圓
 - 日蓮主義の初歩 金貳圓貳拾錢
 - 日蓮主義の權威 金七拾錢
 - 東洋文明の權威 金壹圓八拾錢
 - 日蓮主義 金壹圓貳拾錢
 - 修養と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
 - 日蓮聖人正傳 金壹圓八拾錢
 - 日蓮聖人の感激 金壹圓八拾錢
 - 日蓮主義の綱要 金壹圓八拾錢
 - 國民道德と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
 - 國民教化 金壹圓貳拾錢
 - 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
 - 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
 - 法華經通解 金壹圓貳拾錢
 - 戰士の伴侶 金壹圓八拾錢
 - 法華經講義 各送料八錢
 - 法華經要義 上下上卷下卷各一部金貳圓八拾錢
送料一部十八錢半前金送料不取
 - 大藏經要義 振替東京三一五九六番

目次

我國の現狀と民衆教化(時言)……………本多日生

一、憂ふべき現狀……………二、一切の病源……………三、慢を去つて教に就け……………四、不易の法

道……………五、西洋文明の失脚……………六、東洋文明の眞價……………七、安定せざる學說八、惟神

道の精要……………九、儒教の精要……………十、佛敎の精要……………十一、現社會の救濟……………十二、結論

危險思想に對する警戒……………本多日生

國民の覺悟……………本多日生

佛敎信仰の正統……………本多日生

信仰と道德……………本多日生

日蓮上人教義綱要……………村井日成

私の婦人觀……………安西千賀夫

記事、報道十數件

第廿四年十月號

